大江町埋蔵文化財調査報告書　第６集

K-695

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書（５）

２００３

大江町教育委員会

大江町埋蔵文化財調査報告書　第６集

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書（５）

２００３

大江町教育委員会

序

川の流れは、悠久で止むことがない。平和と戦の連続の歴史が、戦いの文明を愛の文明に転化できないまま、正義や本義のもと、実にしなやかに囁かれ2003年の現在を凌駕し続けているのであります。最上川の直線的な流れが突き当たる山、我らが楯山城は、大江町の出自を語る母なる山城であり、日本三大急流の最上川を以てしても、溶かし崩すことの出来なかった山であります。古人曰く、超えられない山は、脇を通ればよろしい、聡明なる滔々たる最上川は、諭された如、見事に地上を旋回をし、曲線美を誇らしげに開示しながら、大洋に向かって黙々たる歩みを、人事些少を語るがごとく魅せているのであります。わが町の先哲は、森羅万象の拠り所として、楯山を観て、安全安心の砦として、実に、苦しいときも、悲しいときも、楽しいときも、嬉しいときも・・・・あの山—楯山を仰いだのであります。

（この山）の調査を継続できましたのは、文化庁のご理解・ご援助はもとより、関係各位のご支援の賜物であり、町民各位の歴史文化に対するご関心ゆえであります。心より感謝と敬意の念を表するものであります。お蔭様をもちまして、平成14年度の調査報告書が完成したのであります。

平成14年度の調査では、八幡座周辺の発掘調査を実施、柱穴の確認で、柱穴が支える建造物の推察が可能になったのであります。詳細は報告の通りでありますが、今回の調査で当楯山城が、稀に見る大きな規模のものであることが、改めて確認できたのであります。

歴史認識は、時として、流行に惑わされ、正しく認識されないことを、既に私達は経験しているのであります。縦軸としての人間原質—尊厳を、時代認識の怪しい誘惑で翻弄されることがあってはいけないのであります。精査・点検を怠らず、史実を解析すれば、必ずや、横軸としての地球人民のささやかな生活の保証が信じられるのであります。世界の醜い戦いの文明から愛と平和の文明に、転化させうる確信を持ちながら、同時に、最上川の上流—上流に棲む民—上流社会の担い手としての誇りを持って、この報告書が大江町民の町史理解の一助となりますようなご一読を期待したいものであります。

今後とも、左沢楯山城の調査に係る事業に、絶大なるご指導とご厚誼を賜りますように切にお願い申し上げます。

大江町教育委員会

教育長　渡　邉　兵　吾

八幡座周辺（４・５区）

例　　言

1．調査名　　左沢楯山城遺跡発掘調査
2．調査期間　　2002年6月3日～7月22日
3．調査面積　　八幡座　450㎡
　　寺屋敷　300㎡
4．調査体制
　・調査主体　　山形県大江町教育委員会
　・発掘調査指導　　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長　川崎利夫
　・執行体制　　左沢楯山城遺跡関連調査委員会

顧　問	入間田　宣　夫	東北大学東北アジア研究センター教授
委員長	伊　藤　清　郎	山形大学教育学部教授
副委員長	高　山　法　彦	大江町文化財保護委員会委員長
委　員	鈴　木　　勲	河北町町史編さん専門員
委　員	北　畠　教　爾	河北町文化財保護審議会委員
委　員	金　山　耕　三	山形県立博物館嘱託
委　員	誉　田　慶　信	岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科教授
委　員	大　場　雅　之	㈶山形県企業振興公社
委　員	松　田　　進	大江町文化財保護委員会副委員長
委　員	犬　飼　安太郎	大江町文化財保護委員会委員
委　員	柏　倉　　昇	大江町文化財保護委員会委員
委　員	片　桐　　隆	大江町文化財保護委員会委員

　・事務局　　山形県大江町教育委員会社会教育課文化係
　　課　　長／渡　辺　恭　津
　　係　　長／村　上　弘　子
　　主　　事／日下部　美　紀
　　町史編纂事務局員／村　上　宗　紀
5．調査指導　　宮　本　長次郎（東北芸術工科大学　芸術学科教授）
6．縄張図作成　　大　場　雅　之
7．遺構写真撮影　　村　上　宗　紀
8．実測及び測量　　日下部　美紀・佐藤　元希・宮里　竹織・佐藤　晃子・業田　智行
9．平面図作成及び航空写真撮影　　アジア航測株式会社
10．現地調査における参加者は下記のとおりである。
　大江町シルバー人材センター／清野　辰連・佐竹　与惣治・佐藤　昭八・川口　邦美
　山形大学／村上　康広　　東北芸術工科大学／佐藤　元希・宮里　竹織・石垣　義則・佐藤　展久・佐藤　晃子・業田　智行
11．　本調査は、平成10年度から国宝重要文化財等保存整備として文化庁より補助を受けての補助事業である。また、山形県教育庁文化財課からの助言を得ている。
12．調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

本文目次

序

巻頭写真（八幡座４・５区）

例言

平成14年度調査経緯・・・・・・・・・・・・・1

第１章　八幡座周辺の発掘調査・・・・・5

第１節　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・5

第２節　調査経緯と調査方法・・・・・・・・・6

第３節　発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・9

1.　４区・・・・・・・・・・・・・・・・・9

2.　５区・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第４節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・14

第５節　左沢楯山城の主郭・・・・・・・・・・15

第２章　寺屋敷周辺の発掘調査・・・・・16

第１節　調査経緯と調査方法・・・・・・・・・16

第２節　発掘調査

1.　寺屋敷苑池東側建物遺構・・・・・・17

2.　寺屋敷上部の曲輪の試掘・・・・・・19

第３節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・20

第３章　D地区（裏山）の縄張図調査・・・22

第４章　成果と課題・・・・・・・・・・・・・24

第１節　調査の成果と課題・・・・・・・・・・24

１．発掘調査の成果と課題

（１）成果の概要

（２）次年度以降の課題

２．縄張図調査の成果と課題

第２節　左沢楯山城保存整備・・・・・・・・・25

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・38

図版目次

第１図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・1

第２図　左沢楯山城遺跡調査概要図・・・・・・・・2

第３図　左沢楯山城遺跡平面図・・・・・・・・・・3

第４図　大江町主要部と遺跡位置図・・・・・・・・5

第５図　千畳敷遺構配置図・・・・・・・・・・・・6

第６図　八幡座（１・２区）遺構配置図・・・・・・7

第７図　八幡座（３・４区）トレンチ設定図・・・・9

第８図　４区遺構配置図・・・・・・・・・・・・・10

第９図　４区トレンチ・柱穴断面図・・・・・・・・11

第10図　５区遺構配置図・・・・・・・・・・・・・12

第11図　５区土坑断面図・・・・・・・・・・・・・13

第12図　５区トレンチ断面図

第13図　４・５区出土陶磁器片実測図・・・・・・・14

第14図　寺屋敷周辺縄張図・・・・・・・・・・・・16

第15図　寺屋敷池状遺構・・・・・・・・・・・・・17

第16図　寺屋敷全体遺構配置図・・・・・・・・・・18

第17図　寺屋敷上部遺構配置図・・・・・・・・・・19

第18図　寺屋敷出土陶磁器片実測図・・・・・・・・20

第19図　寺屋敷出土鉄釘実測図並びに銭貨拓影・・・21

第20図　Ｄ地区―裏山縄張図・・・・・・・・・・・23

写真目次

写真１　左沢楯山城遺跡全体・・・・・・・・・・・26

写真２　八幡座（４・５区）

写真３　八幡座４区柱列（東側）・・・・・・・・・27

写真４　八幡座４区柱穴（北側）

写真５　八幡座４区（廂部分）・・・・・・・・・・28

写真６　八幡座５区土坑（ＳＫ１）

写真７　八幡座５区土坑（ＳＫ２・・・・・・・・・29

写真８　八幡座５区土坑（ＳＫ４）

写真９　八幡座５区土坑（ＳＫ６）・・・・・・・・30

写真10　寺屋敷池状遺構

写真11　寺屋敷池状遺構・・・・・・・・・・・・・31

写真12　寺屋敷東側柱穴

写真13　寺屋敷トレンチ断面図・・・・・・・・・・32

写真14　寺屋敷上部トレンチ

写真15　寺屋敷上部布堀跡①・・・・・・・・・・・33

写真16　寺屋敷上部布堀跡②

写真17　寺屋敷上部布堀跡③・・・・・・・・・・・34

写真18　寺屋敷上部布堀跡④

写真19　Ｄ地区（裏山）・・・・・・・・・・・・・35

写真20　八幡座出土遺物

写真21　寺屋敷出土陶磁器片①・・・・・・・・・・36

写真22　寺屋敷出土陶磁器片②

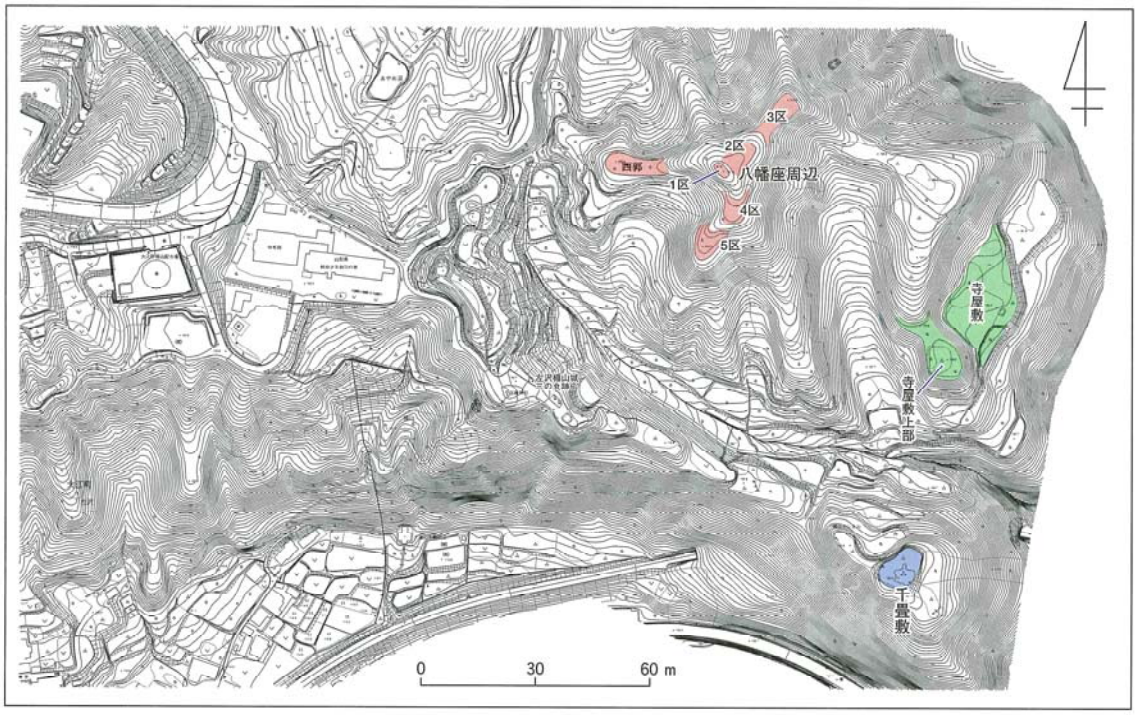
写真23　寺屋敷出土鉄釘・・・・・・・・・・・・・37

写真24　現地説明会風景

平成14年度調査経緯

平成14年度（2002年度）の調査は13年度調査（2001年度）に引き続き八幡座周辺及び寺屋敷・その上部の調査を実施した。平成13年度は、山頂部（１区）及びそこから２m程度の段差をもち北東にのびる細長い曲輪（２区）、さらに1.5～２m下の曲輪（３区）、また、寺屋敷の池状遺構の拡張調査を実施した。大江町埋蔵文化財調査報告書　第５集『左沢楯山城遺跡調査報告書』で詳しく述べているが、１・２区より櫓台２基とそれを囲む柵列跡、３区の性格は明らかではないが建物跡を確認した。今年度調査は２次調査になるが、八幡座周辺―左沢楯山城の山頂となる周辺には櫓台や柵列跡などのほかにどのような施設を備えているのか、城全体の中でどのような位置付けになっているのかを確認することを目的としている。寺屋敷においては、平成13年度調査で池状遺構の様相が徐々に明らかになってきた。平成14年度は、その東側に確認していた円柱を中心とする何らかの施設が、池状遺構に関連するような遺構であるかを明らかにすること、寺屋敷の上部にある大きな曲輪には施設が存在するかどうかを確認することを目的として調査を実施した。

今年度の発掘調査は６月上旬から７月下旬まで実働32日間である。現場草刈り等を経て、山頂（八幡座）から西南方向へのびる２段の曲輪（４・５区）から調査を実施した。４・５区は杉の植林がなされており、全面的な発掘が不可能であるため植林を避けてトレンチを設定した。６月上旬に４区の調査を実施し、地形にそうような形で東側にトレンチを設定するが、ここから２m間隔で一列に６個の規則的な柱穴列を確認する。これによりトレンチを拡張し、合計４箇所にトレンチを設定した。杉があり、トレンチ設定が不可能な箇所については、確認した柱穴より見当をつけたつぼ掘を実施した。いずれも20～30cmで岩盤に達している。そして、４区下６mの段差をもつ５区の調査は６箇所のトレンチを設定し、６月中旬まで調査を実施した。実働13日である。径1.1～1.7mの土坑７基を確認した。



第１図　調査区位置図

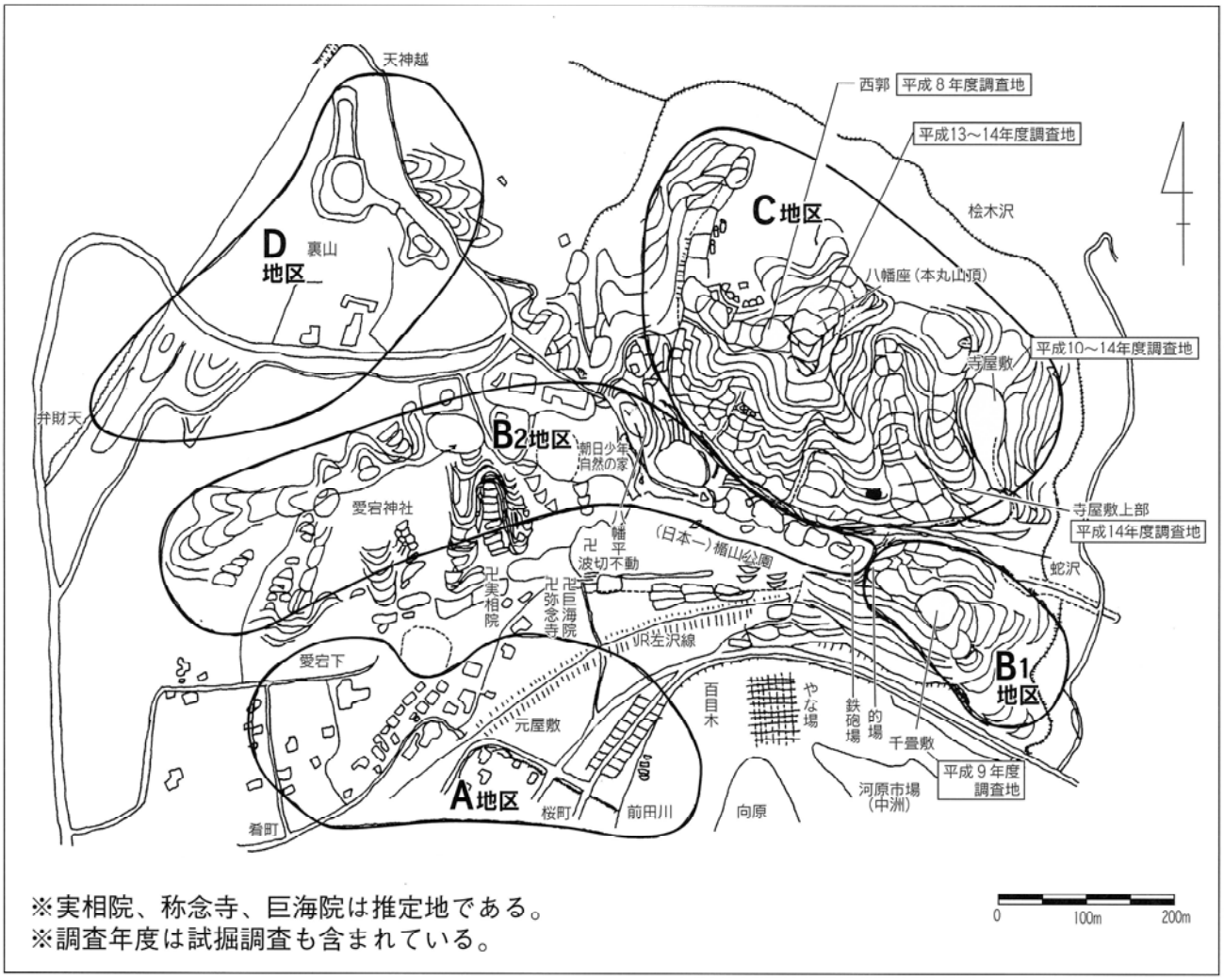
そして、発掘現場を寺屋敷に移し、７月上旬まで実働９日の調査を実施した。寺屋敷については、先に池状遺構の東側で平成13年度調査により柱穴を確認していた部分の拡張調査である。前年度調査区に続けて２つのトレンチを設定する。60～70cmで岩盤に達し、柱穴跡を確認した。そして、寺屋敷との間に10mにも及ぶ急崖をもつその上部の調査では、中央部南北方向に幅1.5m、長さ25mのトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。36個の柱穴群を確認したが、その規模や性格の検証については今後の課題とするところである。

７月３日には、現地説明会を実施した。午前を一般の部、午後を小学生の部（町内小学校４校の５・６年生）と２回に分けての説明会をした。自分の町にある遺跡の発掘現場を初めて目の当たりにする子どもたちの真剣な様子は印象的であった。

７月４日は、八幡座周辺（４・５区）の航空写真撮影を実施した。

７月５日から調査最終まで埋め戻しに入る。この期間は天候が悪く、実働５日間である。

縄張図調査については、Ｄ地区（裏山）の調査を実施した。11月下旬に調査を実施している。Ｄ地区の全体的な性格については、藪があり一部調査が不可能なところがあるために、把握しきれていない部分がある。詳細な成果については第３章に記す。



※実相院、称念寺、巨海院は推定地である。
※調査年度は試掘調査も含まれている。

第２図　左沢楯山城遺跡調査概要図

第３図　左沢楯山城遺跡平面図

第１章　八幡座周辺の発掘調査

第１節　遺跡の立地と環境

最上川が白鷹町や朝日町の山間部峡谷、いわゆる五百川峡谷から村山盆地に入り、突き当たって大きく東へ蛇行する丘陵部に左沢楯山城が位置する。最上川にのぞむ山麓地帯は、近世に最上川舟運の要地として発達した左沢河岸（あてらざわかし）である。その背後を占める山頂の八幡座は標高222ｍで、この周辺に楯山城の主郭があったものと思われる。これを中心に、八方へ伸びる尾根上に曲輪が形成される。

山頂八幡座の北側と西側、そして西南側にのびる尾根上には細長い帯曲輪と腰曲輪が展開する。いま「朝日少年自然の家」をふくむ八幡平（標高206.8ｍ）から楯山公園に至る尾根は、楯山城の中でももっとも大きな平坦地と帯曲輪で囲まれた場所である。

さらにその東側の支丘には、最上川にもっとも近いその屈曲部を扼する「千畳敷」とよばれる曲輪がある。その北側である蛇沢の峡谷を挟んで、山頂より東側には桧木沢にのぞむ「寺屋敷」の平場があり、その背後の山頂との間には、10段にわたる段状の曲輪が展開する。

また、左沢から谷沢・六十里越街道に至る道路（国道458号線）の西側にもいくつかの曲輪群が認められる。したがって、その範囲は東西1.7ｋｍ、南北800ｍにわたり、主要な曲輪群は標高220ｍより150ｍに収まる。

この山城の始まりは、南北朝期に南朝方に属した寒河江荘地頭であった大江氏の支族大江元時といわれ、その後９代にわたって左沢氏を名のってこの地を支配し、最上川をおさえる城として重要な役割を果した。しかし、山形城主最上義光によって大江氏一族が滅ぼされる時に運命を共にし、その後、最上氏の配下として慶長５年（1600）の出羽合戦の際も機能しているが、元和８年（1622）に廃城となった。

平成８年（1996）より、この山城の全容を解明するために、要処の発掘調査が行なわれてきた。今年度の発掘調査は、予備調査も含めて７次目になるが、６次目の山頂部の調査状況をふまえ、山頂部西南にのびる山頂直下の曲輪と、その下に展開する曲輪の２地点を調査した。あわせて２章で触れるように、寺屋敷池状遺構の周辺部と寺屋敷上部（東側）の曲輪に遺構が存在するかどうかを確認するためにトレンチによる試掘を実施した。

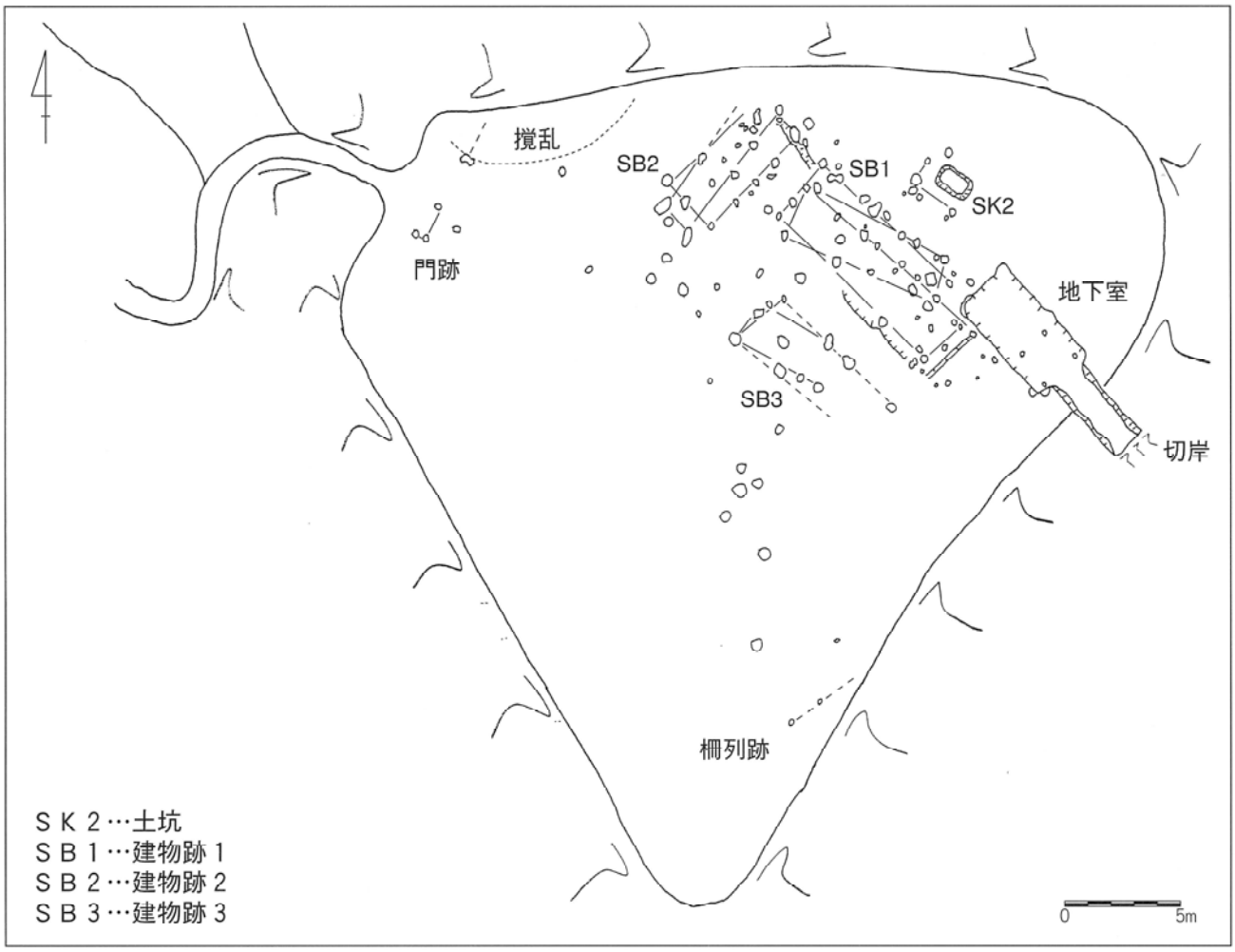
第４図　大江町主要部と遺跡位置図

第２節　調査経緯と調査方法

発掘調査を開始して以来７年目を迎えて、今年度第６次調査の経過に入る前に、これまでの調査経緯について簡単に触れておきたい。

平成８年（1996）の予備調査は、山頂部の八幡座より西側へ張り出す西１郭と西２郭およびその間を隔てる切岸に対して発掘調査が行なわれた。長さ27m、幅12mの西１郭には、２棟の小規模な建物があったが、周囲は角柱による柵列に囲まれ、それが西２郭との間の切岸に３列の柵列を設けていることが明らかになった。おそらくやや規模の大きな曲輪には、ほとんど柵列のめぐる状況が推測されている。

平成９年（1997）から始まった第１次調査及び翌平成10年（1998）の２年にわたり、最上川屈曲部にもっとも近い千畳敷の調査が行なわれた。ここは標高194m、比高80mで、面積540㎡の三角形状を呈する平坦地で、周辺を帯曲輪が５～10段めぐる独立した曲輪を形成し、楯山城の中では最上川にもっとも近い堅固な曲輪で、その西の楯山公園との間には帯曲輪が連なり、堀切によって遮断されている。土橋を渡って曲輪に上がってすぐの西南隅に棟門が開き、周囲には柵が全周する。北寄りに４×３間の東西棟の主殿らしい掘立柱建物があり（ＳＢ１）、これに逆Ｌ字の形で４×２間の建物跡が検出され（ＳＢ２）、ＳＢ１の前面に３×２間の東西棟が配される。そしてＳＢ１の東側に、北西―南東方向に長さ4.6m、幅2.6m、深さ1.6mの地下室が検出された。平面形羽子板状で、入口が東側切岸にむかって開口する。これらの建物群は２～３回の建てかえが行なわれていることから16世紀前半から17世紀前半までの廃城時まで機能していたのであろう。（第５図）



第５図　千畳敷遺構配置図

第６図　八幡座（１・２区）遺構配置図

平成11年（1999）と平成12年（2000）の第３・４次調査は、山頂部より東の下に位置する「寺屋敷」といわれる広い平坦地の調査が行なわれた。千畳敷より蛇沢の峡谷をはさんで350m北側に位置する。この地は16世紀前半に寒河江市落衣（おとも）から移った鉄囲山巨海院があった場所といわれ、当時は真言宗であったという。（第14図）

予想したとおり、桁行５間、梁間５間（12m×12.5m）の掘立柱による仏堂と思われる建物跡が検出された。それは16世紀後半に寺が山麓の元屋敷に移転した後に、桁行６間、梁間３間の南北棟の倉庫風の建物となり、城郭の施設の一部として利用されたと考えられる。さらに仏堂と思われる建物の南側14mに不整長方形を呈した石組みを配置する池状遺構が姿をあらわした。この周辺からは、蓮弁文青磁皿や白磁の高台付皿の破片なども発見されている。その周辺部の発掘調査は、今年度も行なわれている。寺屋敷は左沢楯山城の鬼門にあたり、ここに宗教施設が置かれたのであろう。（第16図）

平成13年（2001）第５次調査は、楯山城山頂部の狭い場所とこれにつづく北側の曲輪を発掘した。山頂部標高222mの地点は100㎡にも満たない狭い場所であるが、２段ほど低い段を形成し、その上に南北1.5m、東西4.2mで２間×１間の櫓台が発見された。これより２mほどの段差をもって北側へのびる曲輪にも2.1m×2.2mのほぼ方形の櫓台があり、いずれも切岸にのぞむ周囲には柵列の痕跡が認められた。その北側にもやや広い平坦地があり、建物跡が２棟ほどあったと考えられるが、やはり周囲には、柵列がめぐっていた。以上のように山頂部には、２基の櫓台の跡とそれを囲む柵列がめぐり、さらに北側平坦地の曲輪につながる。山頂付近には大きな建物が建っていた跡はなく、せいぜい小規模な小屋のようなものであったと推測される。

以上、予備調査及び５次にわたる調査が６年間実施された経緯である。

発掘７年目にあたる６次調査は、平成14年（2002）６月３日から７月22日まで実施され、その間７月３日には多数の町民や関心をもつ人などが集まり、午前は一般、午後は小学生を対象に現地説明会が開催された。

さて今次発掘地点は楯山城山頂の櫓台のある曲輪から西南方向へのびる２段の曲輪である。山頂部より５ｍの切岸をもってその下に展開する長方形の曲輪（４区）は、長さ21ｍ、幅10～12ｍある長方形の平面を呈する。４区は杉の幼木の植林がなされているので、全面を発掘することは不可能であるため、植林を避けて当初地形にそって東寄りに幅1.2ｍ、長さ10ｍのトレンチとこれと向きを変える形で逆Ｌ字形に６ｍのトレンチを設定して発掘に入った。さらに先端部にも1.5ｍ、長さ５ｍのトレンチを設定した。さいわい最初のトレンチより角柱列が見事に並列の状況で発見された。それと平行して円柱も並んでおり、これらが掘立柱建物跡の東辺桁行に当たると推測されたので、西辺や両梁間をおさえるために立木を縫うようにサブトレンチを入れて、ほぼ建物の全容を把握することができた。（第７・８図）

ついで４区の下６ｍの切岸をもって西南方向に連なる５区の曲輪の調査に移った。４区の曲輪とほぼ同じ大きさで西南方向へ張り出すが、やはり杉が植えられていてその間に幅１ｍまたは、1.5ｍのトレンチを要所に設定して精査を行なった。ここでは、径1.6ｍ前後の丸くて底面も平らな土坑が７箇所で検出された。柱穴は４区に比して小型で浅く、角柱・円柱両様が認められた。一部の土坑でその周囲に柱穴が密集する傾向があった。建物跡が２～３棟存在したと思われるが、その規模を明らかにするにはいたっていない。（第10図）

６月下旬より７月上旬に、発掘地区を寺屋敷の上にある曲輪に移し、トレンチにより遺構の有無を調査したが、トレンチ内より多くの柱穴群が検出された。中には布堀によって等間隔に円柱や角柱が埋設されている痕跡も認められ、何らかの重要施設が存在する可能性を暗示している。トレンチは長さ25ｍ、幅1.5ｍで布堀の部分を東西に拡張している。（第17図）

最後に寺屋敷池状遺構の縁辺西辺の区画を確認することと、東側に存在する建物の規模と性格を明らかにするために拡張精査を行ない、池状遺構の規模や様相とその東側の建物遺構を明らかにすることができた。（第15・16図）

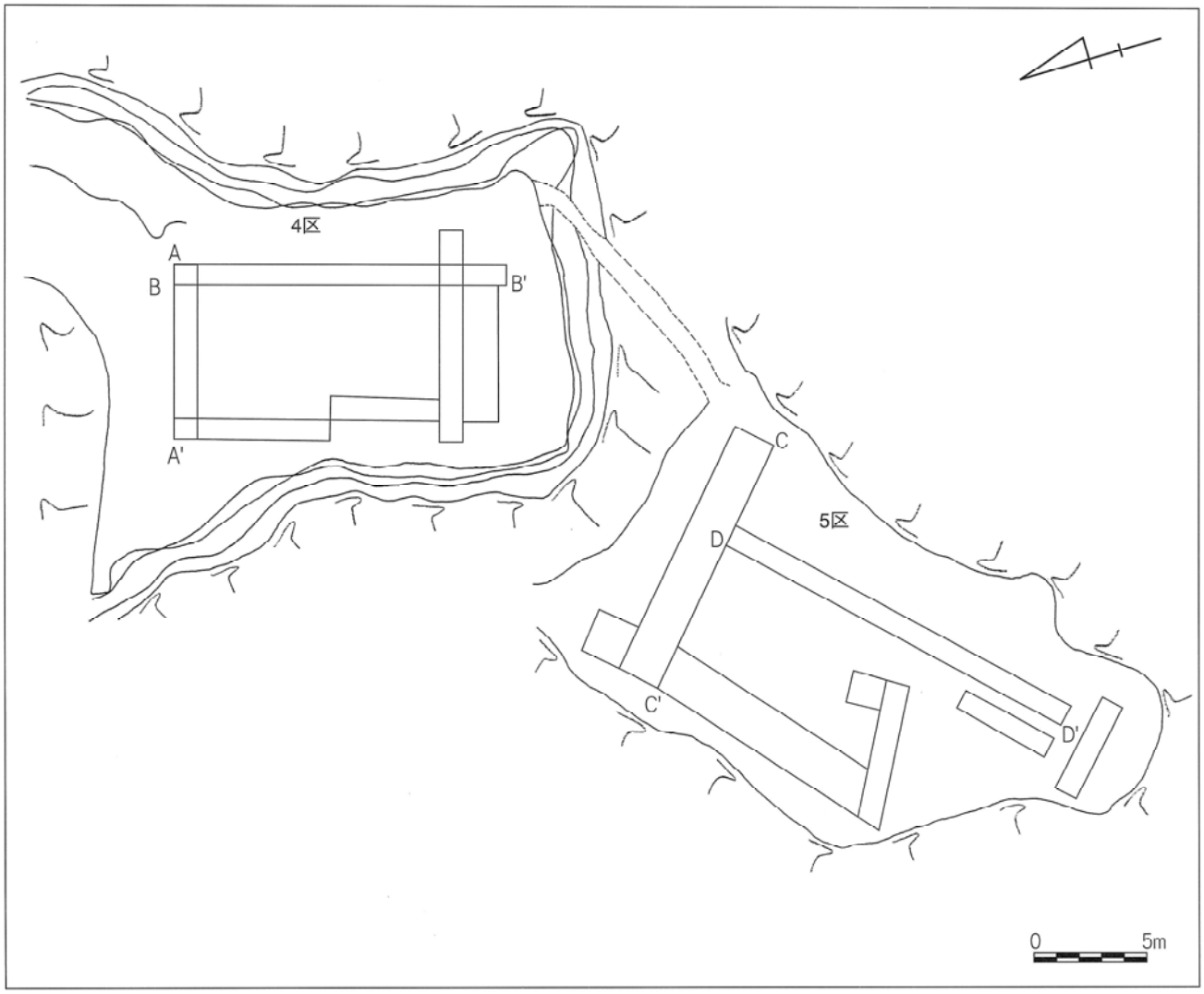
以上のとおり、６月上旬より始められた第６次調査は７月下旬で終了した。今次調査は４区の建物遺構、５区の円形土坑群と柱穴、寺屋敷上部の曲輪における遺構の確認、寺屋敷池状遺構の東側の建物遺構を検出して、左沢楯山城の構造をより明確に把握することができた。

第３節　発掘調査

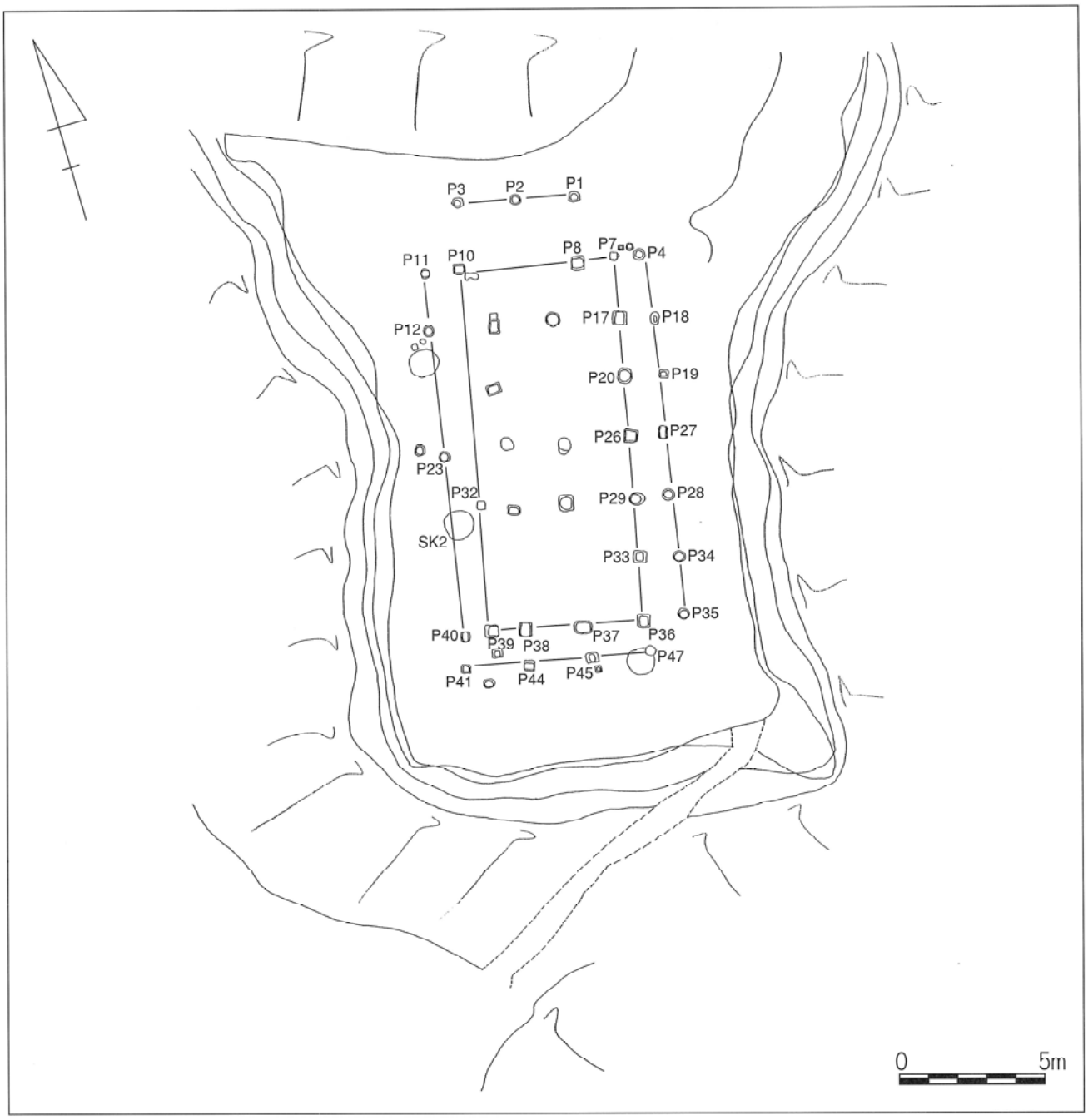
１．４区（第７・８・９・12図）

４区は楯山山頂（八幡座）の櫓台がある遺構より、高さ５ｍの切岸の下に展開する曲輪で、長さ２１ｍ、幅８～12ｍの不整長方形のプランをもち、南側に張り出す平坦地である。左右両側は切岸によって削り出されて狭い帯曲輪が下方にめぐり、前方は南西側に６ｍの切岸による段差をもって５区の曲輪が展開する。

最初東側で発見された柱穴は50×50㎝、深さ50～70㎝の規模をもつ柱穴群で、柱間寸法２ｍをもって１列に７個（Ｐ７・17・20・26・29・33・36）、北北東・南南西に規則正しく配列される。このように大きくて深い柱穴掘方ははじめての検出であり、大規模な整った建物遺構の存在を示す。そしてこれらの柱穴のさらに東側には、それらと1.2ｍ離れて対応する形で円柱穴が並ぶ。前記の主柱穴に対応する廂（ひさし）の柱穴であろう。建物の東辺の桁にあたる部分であることが分かる。梁に当たる部分は南辺で検出された。これらと直角に４ヵ所並列する柱穴（Ｐ36・37・38・39）がある。ほぼ２ｍ等間隔であるが、４本目のみ間隔がせまく１ｍとなっている。そして、その西側に主柱穴と対応して円柱が配される。いずれも柱穴の深さは50～70㎝である。



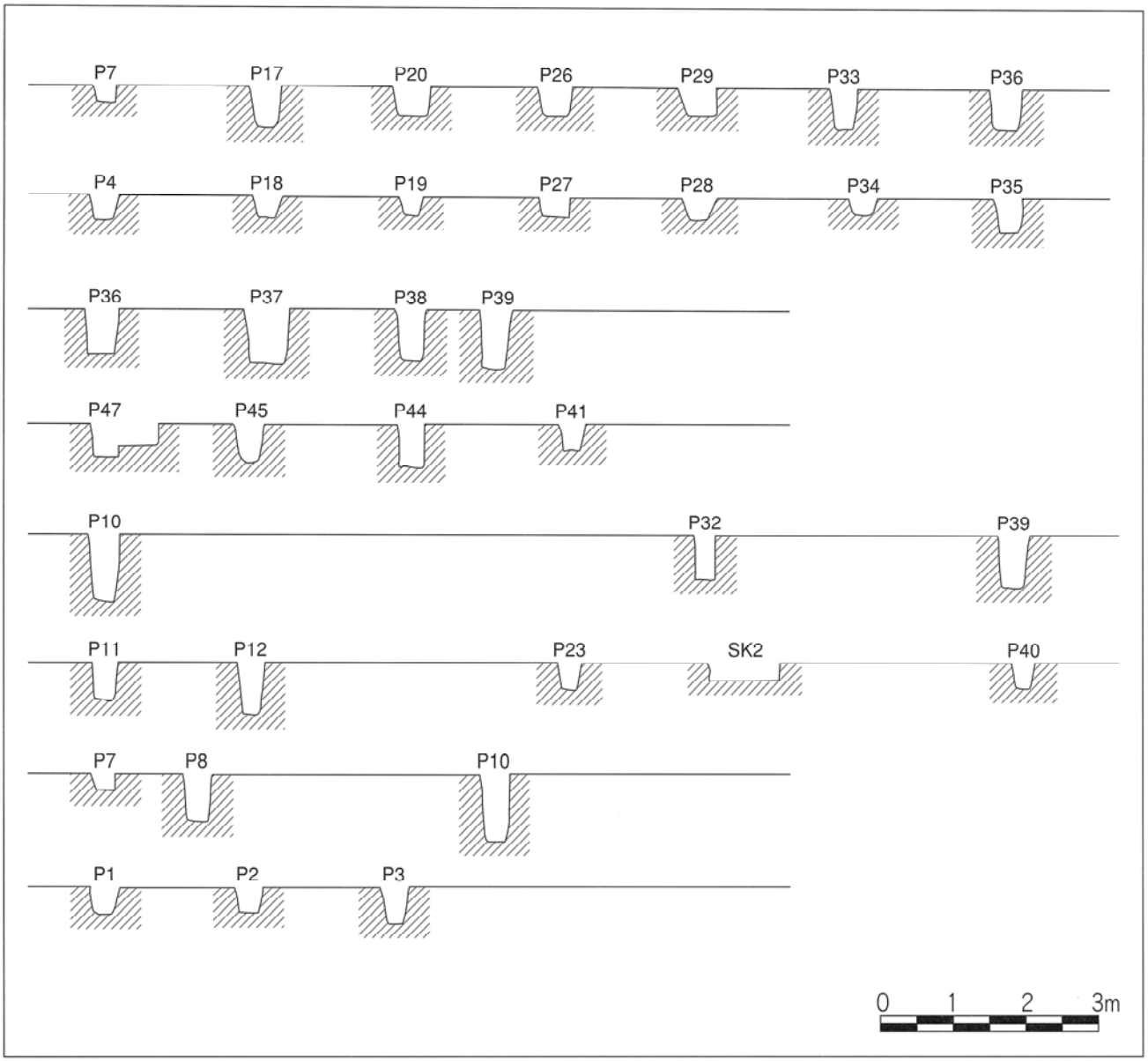
第７図　八幡座（３・４区）トレンチ設定図



第８図　４区遺構配置図

南辺の梁間の前面にもほぼ１ｍの間隔で、一まわり小さい角柱列が対応する。途中杉の幼木があるために確認できなかった場所もあるが、桁行５間、梁間２間半の全面廂付きの立派な掘立柱建物が存在したことがわかる。内部にも対応する部分に、円柱や角柱痕があるところから総柱ではないが間仕切りがあったようである。背後に切岸をひかえた北側の廂は、やや広く屋根がかかった空間として利用されたものであろう。

四面廂、寄棟造り、桁行５間、梁間２間半のかなり立派な造りの建物であることが推測される。これが長方形の曲輪の全面に立地していたのである。この場所が「ゴホンマル」（御本丸）と呼ばれていたことからして、山頂部櫓台下のこの曲輪に本丸と呼ばれるような重要な建物があったものと思われる。年代を示す遺物は、瓦器の火鉢破片１点のみであるが、柱穴の一部に部分的に建てかえの痕跡が認められるので、一部の建てかえがあったものと思われる。16世紀後半から17世紀初頭と推測される。切岸にのぞむあたりに柵列などはなかったが、下の帯曲輪から角柱列が出土したという。



第９図　４区トレンチ・柱穴断面図

２．５区（第７・８・10・12図）

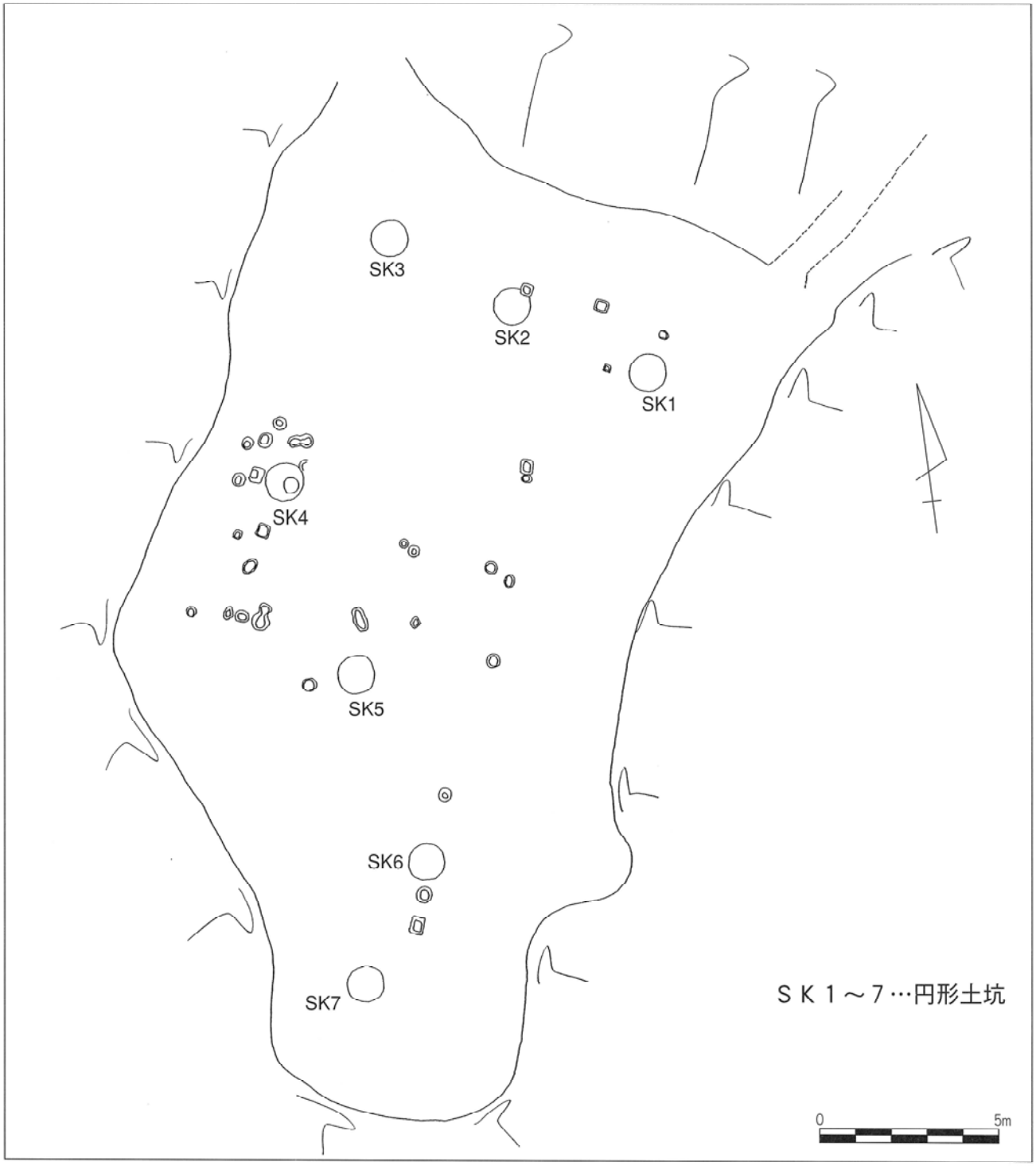
４区が南方向に向くのに対して曲輪の長軸が南西に向う。４区と同じ規模の大きさの不整長方形プランで、先端部がやや突出する。ここも杉の植林地であったため要処にトレンチを設定し遺構の配列を確認した。

ここからは径1.1～1.7mの正円形の土坑が７基（ＳＫ１～７）発見された。北側の切岸にのぞむ前面に３基がほぼ２m間隔で並ぶ他に、若干の誤差はあるものの３m前後の間隔を保っている。北東隅のＳＫ１は1.1m直径の正円形で、深さは現地表より60cm、周壁は底面に対して直角に起ち上がる。底面は、全く平坦であり岩盤をくり抜いている。遺構検出面からの深さは33～40cm。ＳＫ３もこれと全く同じで、径1.6mの正円形の平面で、発掘面からの深さ25～30cmであった。ＳＫ４は径1.7mで底面が平坦でなく、一部に円形に穿たれたところがあったが、他は底面が平らで、周壁は直角に起ち上がる。（第11図）

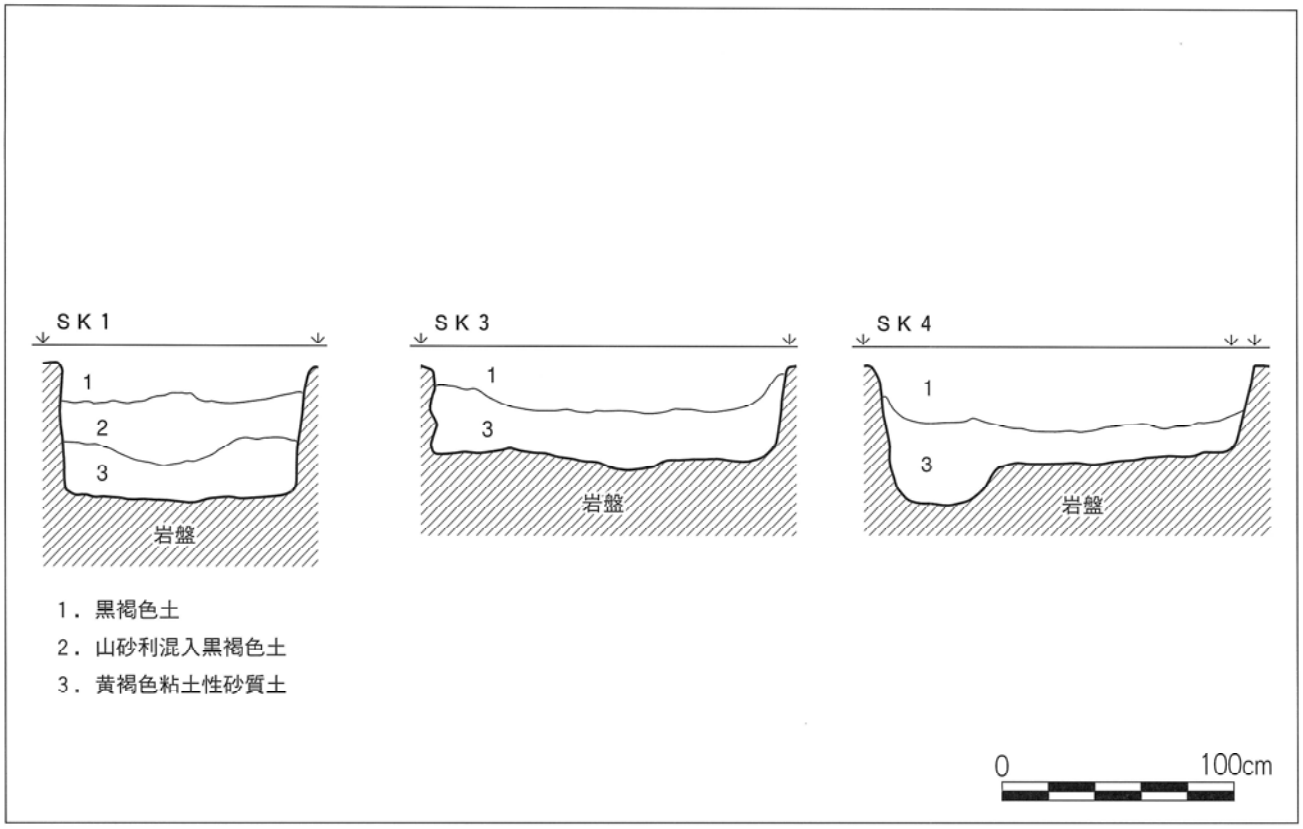
同様な形態の円い土坑は、ほぼ大きさも一定しているので、ゴミすてやトイレ用の土坑でもないし、もちろん30～40cmの深さで、底面が平坦であることからして柱穴でもありえない。おそらく水を貯溜した桶などを据えた跡ではないかと推測した。ＳＫ４の周りには多数の円柱穴があり、ＳＫ６の南北にも円柱穴が並ぶことからして、これらの大きな桶を囲う施設が存在した可能性がある。楯山城にはこれま

で井戸の遺構がほとんど検出されていない。おそらく５区の曲輪には、桶に水を入れて貯留する水小屋があったのではないかと想像される。建物の状況は、まだ把握されるにはいたっていないが、水小屋が何棟かあり、覆屋のない桶を据えたところもあり、ＳＫ３や７のまわりには柱穴が全く検出されなかった。

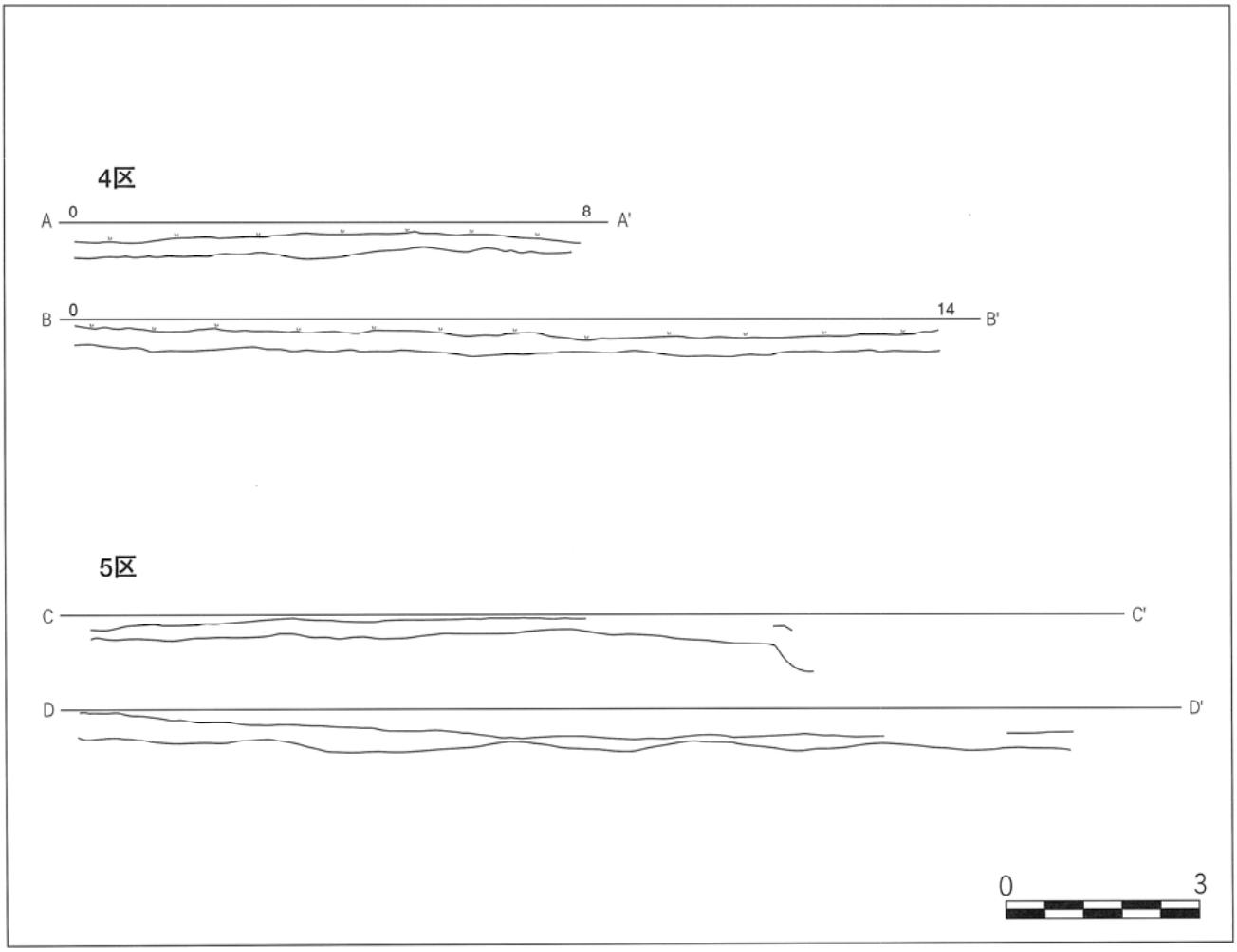
トレンチにより植林部分を除外した制約された調査であるために、今後の再検討が必要であり、とくにどのような建物があったかについては課題として残される。あるいは、東側のトレンチ内に良好な柱穴列の並びも検出されている。柱穴の大きさからして小規模な建物があったことは確かであろう。なお、円形土坑は、土層断面より観察するに、自然に周辺より土が流れ込み埋まったようである。（第11図）



第10図　５区遺構配置図



第11図　５区土坑断面図

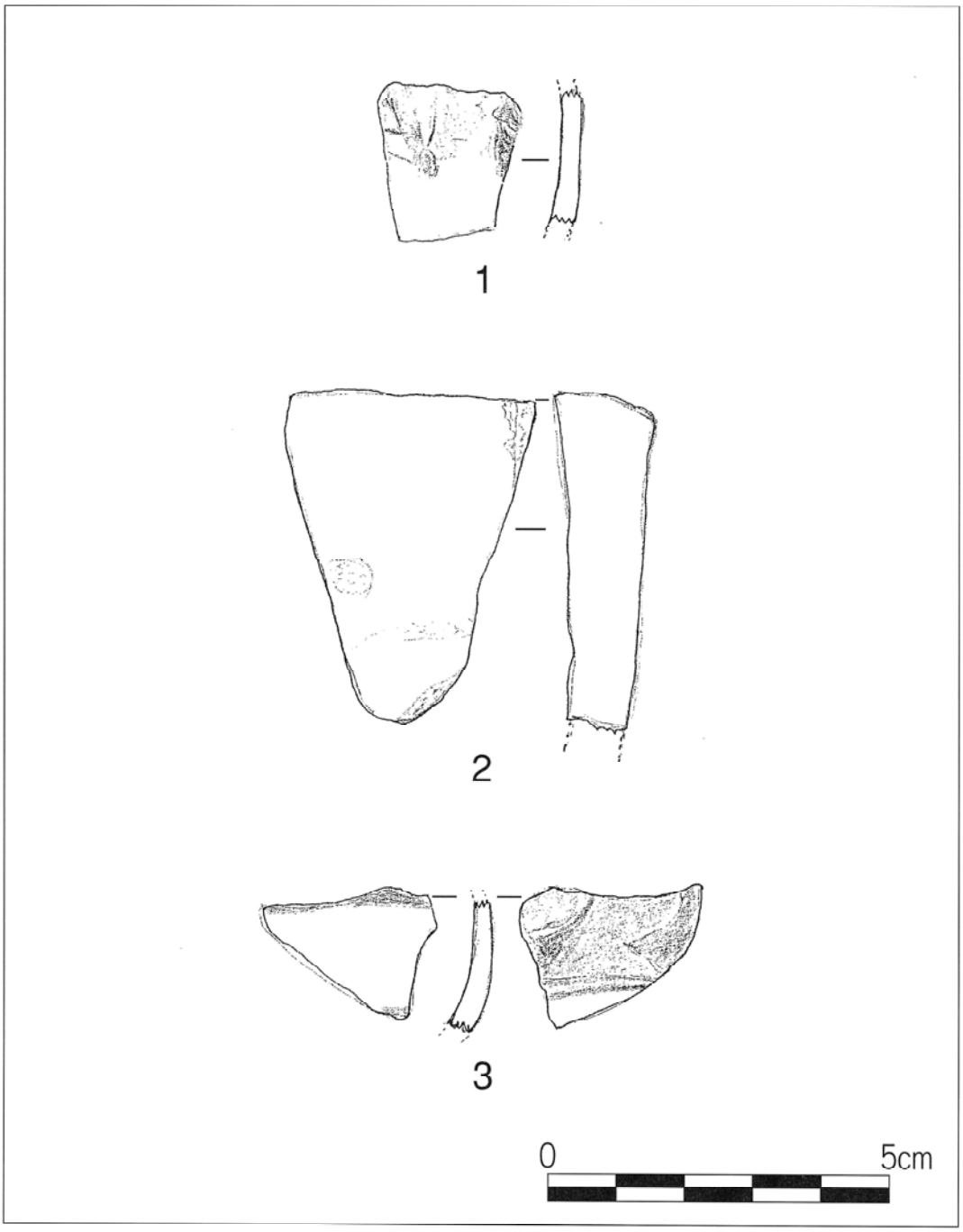


第12図　５区トレンチ・柱穴断面図

第４節　出土遺物

左沢楯山城の７年にわたる発掘調査で出土遺物はきわめて少量である。これは日常生活の場ではなかった山城という性格や城破(しろわ)りの際に徹底した整理が行なわれたからであろう。あるいは、どこかに一括廃棄した場所があるに違いない。

この度も主郭の一部と考えられる４区からは１片の染付磁器小破片、５区から同じく染付磁器小破片３片と瓦質土器破片１点が発見されたにすぎない。瓦質土器は口縁部の破片で（第13図―２）黒灰色を呈し、口縁部が肥厚する。火鉢の一部ではなかったかと思われる。図12－１・３は３㎝以下の小破片で染付けが認められるが、茶碗や小皿などの破片で伊万里系とみられるが、その年代や種類は特定できない。



第13図　４・５区出土陶磁器片実測図

第５節　左沢楯山城の主郭

楯山城は主要な５曲輪群によって構成される。すなわち、山頂の八幡座を中心とする曲輪群（Ｃ区）、その前面にあたる南側の八幡平から楯山公園にいたる曲輪群（Ｂ２区）、Ｂ２区東側に位置し最上川にむかって突出する千畳敷の曲輪（Ｂ１区）、寺屋敷とその背後の山頂部東側に位置し、段状に連なる曲輪群（Ｃ区）、さらに国道458号線の西側に展開する曲輪群（Ｄ区）など、少なくとも谷をへだてて５ヵ処に主要な曲輪群が散在する。それらはいずれも独立した城郭の観を呈し、主郭を中心に一極に集中するような求心的な構造ではなく、分散的な傾向が強い。

集中的な城郭としては、山形市長谷堂城があげられるし、分散的な山城としては天童古城（舞鶴山）がその典型であろう。

分散的な構造であっても、城主などの居城する主要な曲輪群が山城の場合もっとも高所に存在する。これを「主郭」と呼んでおく。昨年の第５次において山頂の八幡座の発掘が行なわれた。ここは非常に狭い空間なので、居住性のある建物の存在は考えられず、予想通り山城全体やその周辺部を展望できる櫓台が２基あったことが明らかになった。

さらに狭い尾根道を北進するとやや広い平坦地があり、ここに主郭に相当する建物があることを推定したが、発掘調査の結果、柵によって囲まれてはいるものの大規模な建物跡は発見されなかった。

第６次における今次調査において、高さ５ｍの切岸によって山頂部と区画される４区の曲輪に主殿らしい建物跡が検出された。それは桁行５間、梁間２間半の四面に廂をもつ建物で、柱穴はこれまで検出されたどの建物跡より深くて大きなもので、それらがほぼ７尺等間隔で並び、南前面に妻入状に入口があったものと推定される。

そして４区より６ｍの切岸で遮断される下の５区には７基の正円形土坑が発見された。この土坑は、一部岩盤を穿って設けられているが、桶状のものを据えて水などを貯溜した可能性が高い。そして、周辺部には柵列がめぐっていた。

山頂部の櫓台と主殿らしい建物跡、水場で形成されるこの場所が左沢楯山城における主郭であったものと推測される。西から南側にかけてはやや広い曲輪が段状に連なり、東側の寺屋敷の背後にいたるまで幾段にも曲輪が形成され、見事な主郭防御の施設となっている。北側は急崖となって桧木沢によって隔てられる。とくに、山頂部八幡座を中心とする主郭部をとり囲む曲輪群は堅固で、最上川からもひときわ高くそびえ立っていたのである。

第２章　寺屋敷周辺の発掘調査

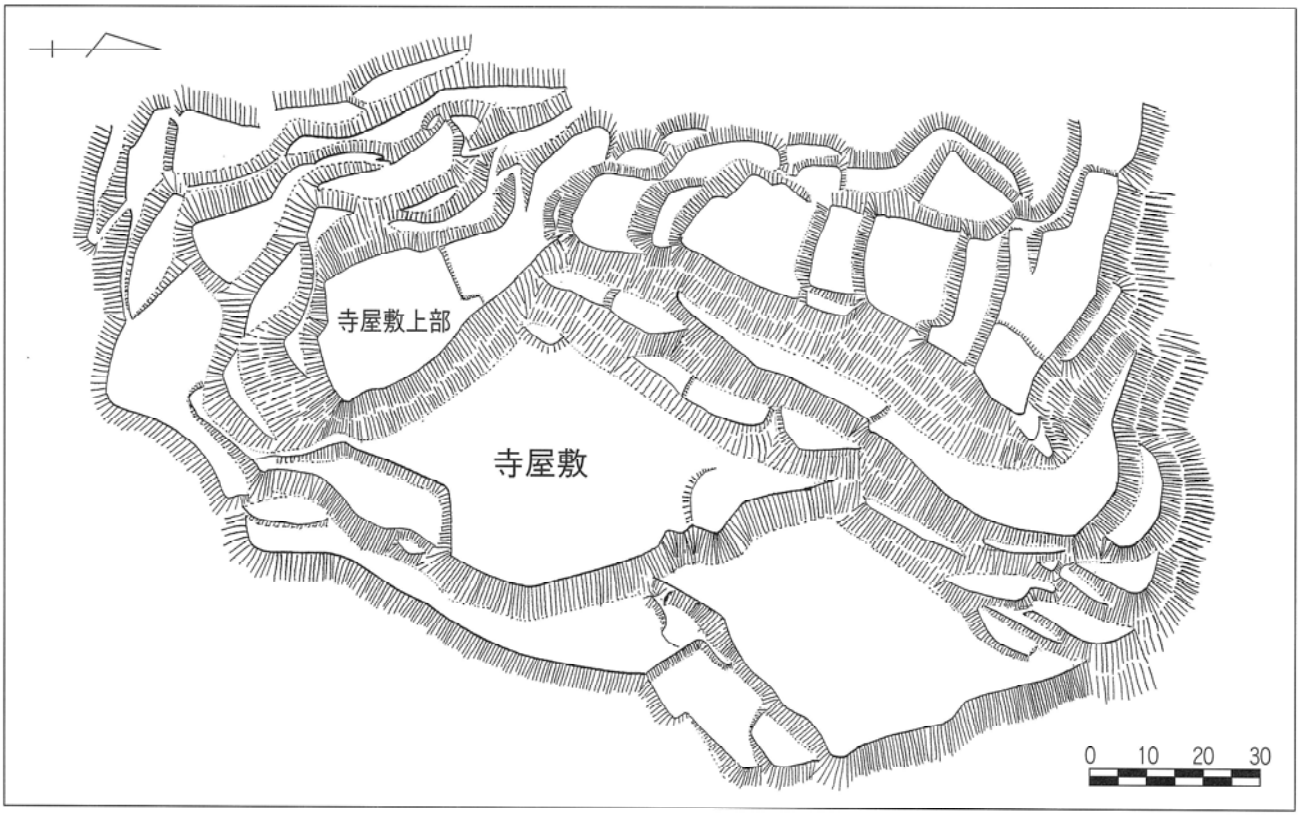
第１節　調査経緯と調査方法

寺屋敷は山頂部八幡座より東方200mに位置し、標高167mで山頂との比高差は35mである。桧木沢と蛇沢の深い峡谷に囲まれた465m²ほどの広い平坦地である。この遺跡は、平成10年（1998）の試掘に始まり、今次調査で第５次目の調査である。すでに詳細は大江町埋蔵文化財調査報告書　第３・４・５集『左沢楯山城遺跡調査報告書』（2000･2001･2002）に記述した。この台地北側において５間四方（５間５面）の仏堂らしい建物跡が全掘されたが、これが巨海院の前身の真言宗寺院であったと思われ、16世紀前半までこの地にあり、その後伽藍の一部は城郭施設として再利用された。

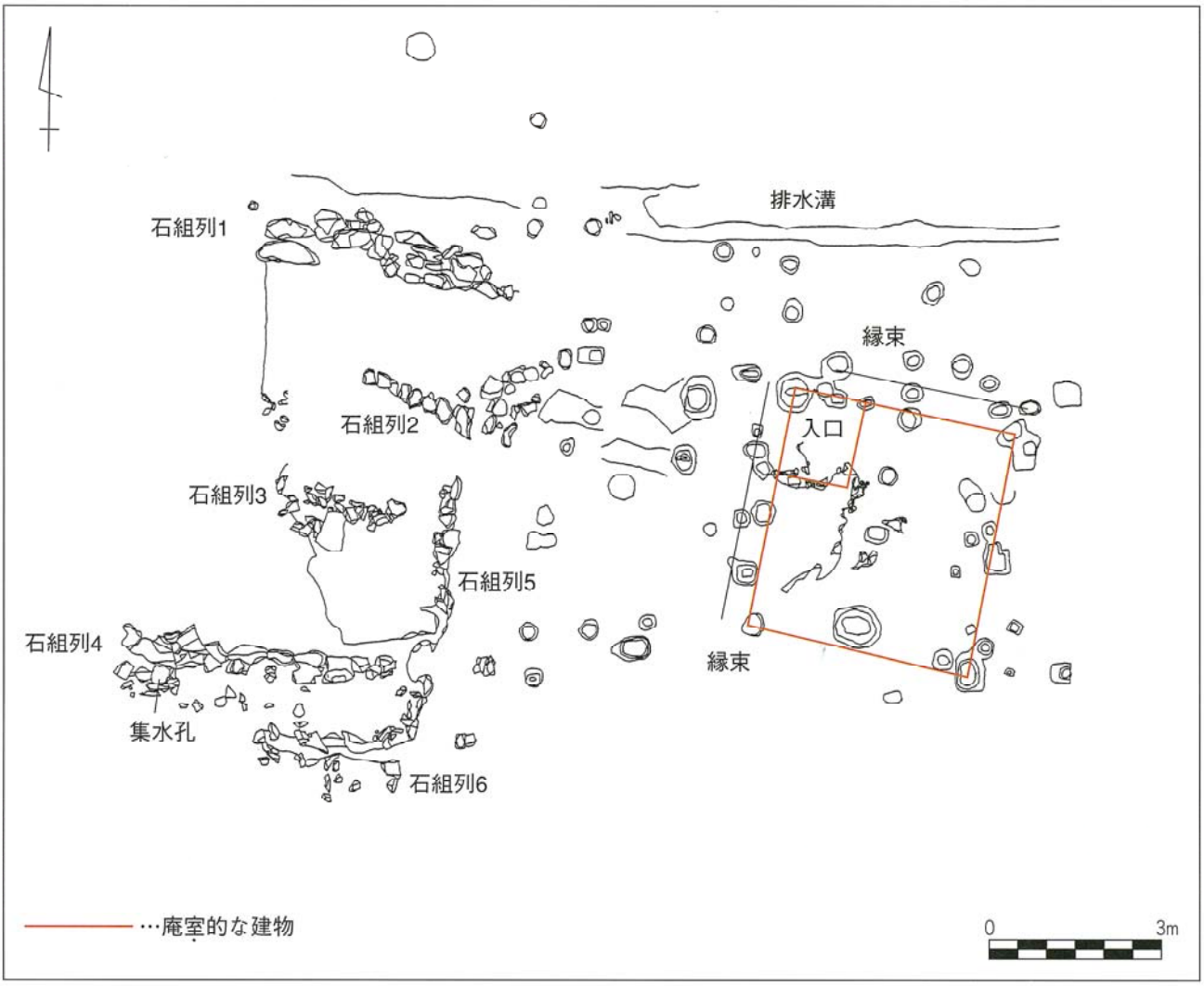
平成13年（2001）の調査で、寺院跡の前面南側12mで池状遺構が調査された。これは南北12m、東西８mの規模の不整長方形石組を配した池で、寺院が存在した頃からあった池と考えられ、その後もしばらく苑池の形状を保っていたらしい。この度は、池の西縁を確認し、さらに池の東側に柱穴列が存在するので、その規模と性格を明らかにする目的で、４グリッド64m²の発掘精査を行なった。後述するように、ここから、３度ほど建てかえられた小規模な方形の柱穴が多数検出された。

さらに寺屋敷の背後西側に10m以上の高い壁をもって区画される曲輪における遺構の存在を確認するために、幅1.5m、長さ25mに及ぶトレンチを設定して調査を実施した。その結果、30基余りの方形の柱穴や東西に配列される布掘りの中には柵状に柱穴列が２列にわたって配列される遺構を確認した。この曲輪は蛇沢の深い谷にむかうが、建物を囲む柵列とその外側に建物があることが分かった。この曲輪内の調査は、来年度以降の課題として残される。

これら寺屋敷周辺の調査は、今次調査の後半期４・５区の調査がほぼ終った時点に開始された。



第14図　寺屋敷周辺縄張図

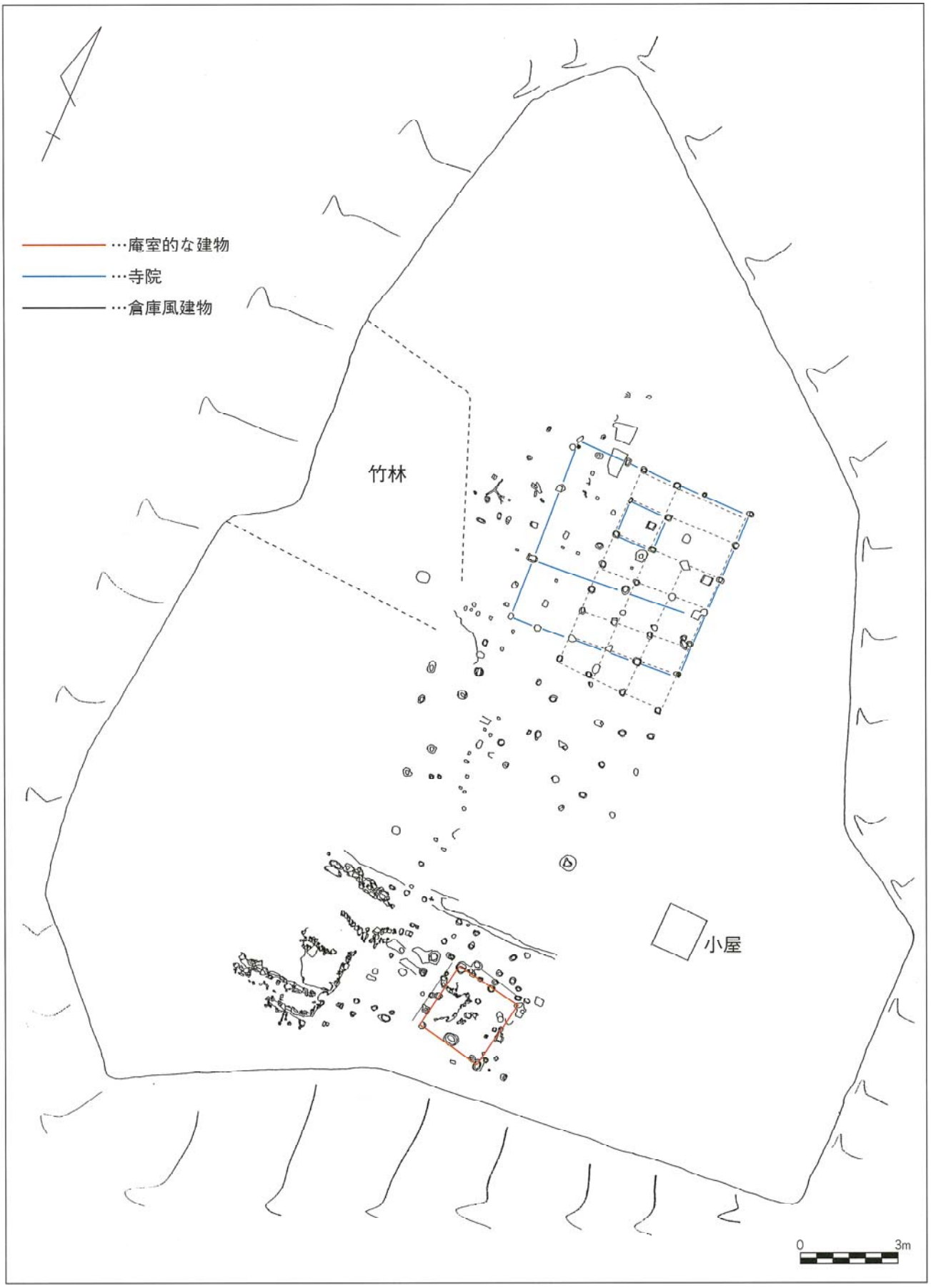


第15図　寺屋敷池状遺構

第２節　発掘調査

１．寺屋敷苑池東側建物遺構（第15・16図）

池状遺構の東縁より東へ3.5m離れたところに、２間四方の瀟洒な建物があった。柱間寸法は２ｍで、桁・梁とも４ｍの規模で中心にも柱があった。柱穴は、掘り方がわりと大きく50cm～70cmで、底面が方形を呈することから角柱を用いているようである。深さは検出面から50～70cm程度である。その周りには池にのぞむ西側と北側に縁束（えんづか）（縁側を支えている短い柱）と思われる柱穴も認められる。主柱穴との間隔は西側で約１ｍ、北側でも１ｍを測り、西側より北側に広縁があったようである。この建物は３回ほど建てかえられているらしく、主柱穴の周囲にそれと重複する状態で２つから３つの柱穴が認められた。また、建物の西北隅の石組があるあたりの地面はよく踏み固められた状態を示し、このあたりに玄関にあたる入口があったようである。庭のほとりに建つ庵室的な建物であった可能性が高い。２間四方の小規模な建物に縁がめぐり、池にのぞむ構造は、いかにも茶室としての雅びの場であったのであろう。この周辺から青磁や白磁など中世における高級な輸入磁器が発見されていることもこれを裏付けるようである。なお周辺部より柱穴跡の発見も多いことから、以前のもっと規模の大きな建物や隣接する建物も存在したことが考えられ、広い範囲にわたる調査が必要であろう。



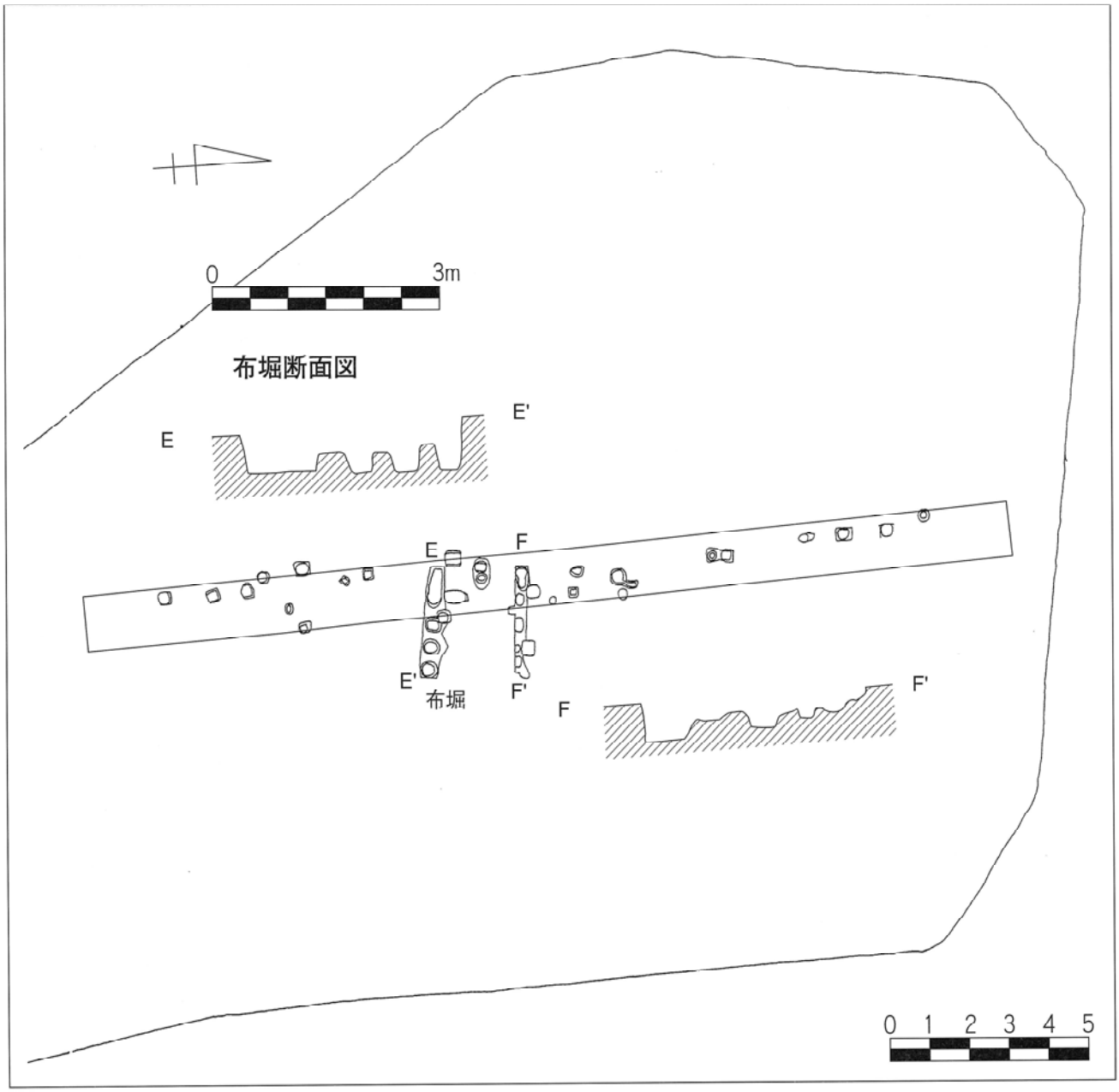
第16図　寺屋敷全体遺構配置図

2．寺屋敷上部の曲輪の試掘（第16図）

寺屋敷の上部西側にも広い曲輪が展開し、南側の蛇沢に向って段状に連なる。寺屋敷との間は急崖をなし、その高さは10mに及ぶ。長さ南北に42m、最大幅24mの平坦地で、北から南へゆるやかに傾斜する。その中央部南北方向に幅1.5m、長さ25mのトレンチを設け、遺構の有無を確認した。中央部で布掘りによる角柱列が発見されたが、その部分のみ東側に若干拡張した。幅20～30cmの溝の中に10～30cmの間隔で主として角柱が埋め込まれていた。

それは1.5～２mの間隔で２列にわたって東西方向に延びることが確かめられた。何らかの施設を区画する柵列群と思われるが、どのように広がるのか今後の調査にゆだねられる。トレンチ内の角柱列の南北より36個の柱穴群が発見された。それらの中には重複するものもあり、２回以上の建てかえが行なわれたのであろう。大きさは30～60cm、深さは40～50cm程度のものが多い。

従ってこの曲輪には柵列に区画された建物や区画外に広がる建物群が数棟あったものと推定される。出土遺物はなかった。



第17図　寺屋敷上部遺構配置図

第３節　出土遺物

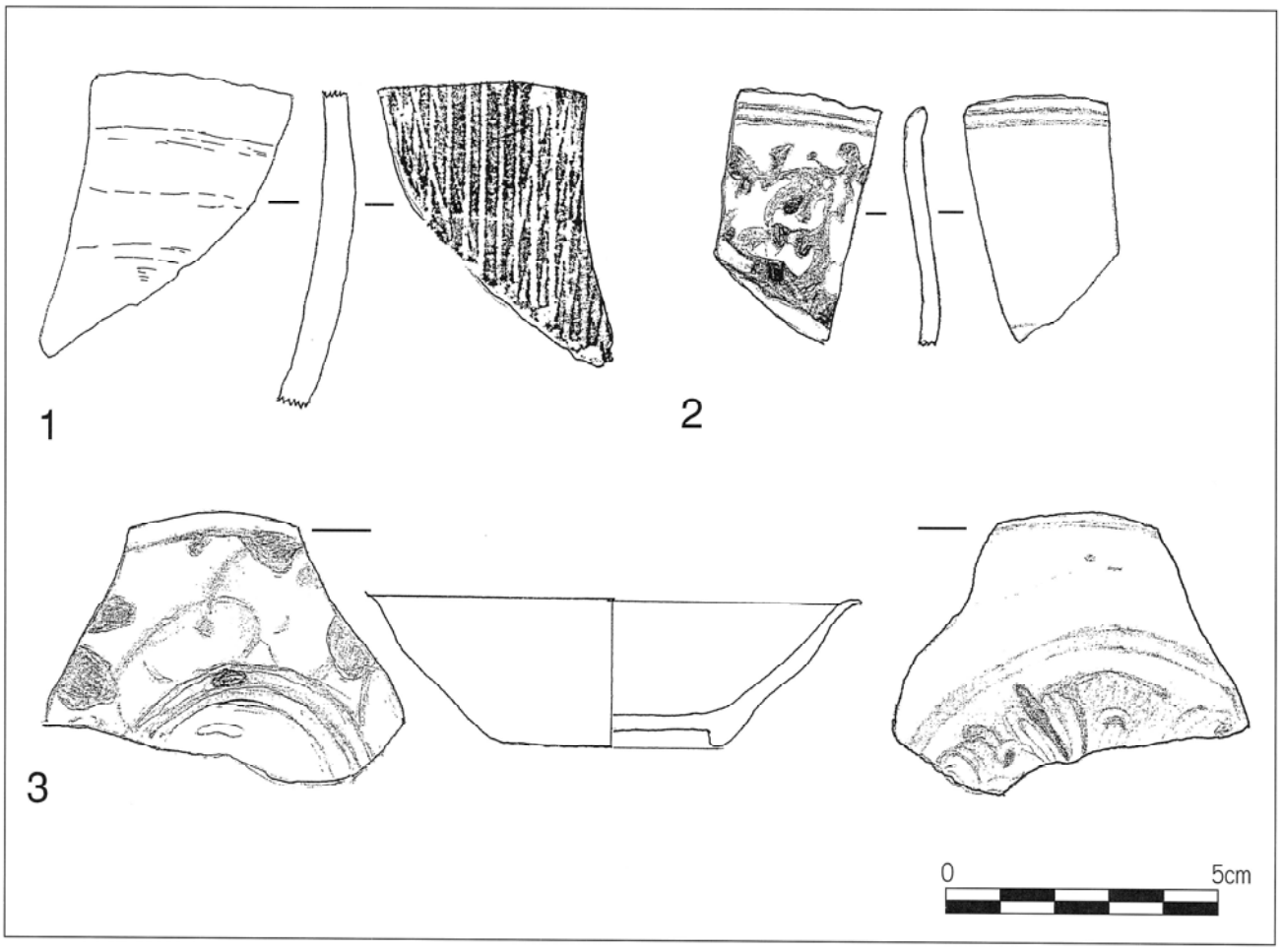
左沢楯山城の中で、寺屋敷池状遺構の周辺は比較的出土遺物が多い。この度も苑池やその東側の発掘区より染付磁器片21片、陶器片５片が発見された。いずれも細片である。陶器片のうち３片は卸し目を内面にもつ擂鉢片で、鉄釉や無釉のものである。第18図－１は黒褐色の釉を施したもので、内面に卸し目が上下に直線的に施される。他の２片の陶片は灰釉によるものであろう。

磁器は比較的大きな破片を図化した。第18図－２・３ともに植物文様の染付で、特に３は器形の推測が可能な破片である。口径９㎝、高さ2.5㎝ほどの高台付小皿である。底面にも蓮華様の文様が描かれている。２・３ともに景徳鎮産の輸入磁器で、他の破片もこれに類するか伊万里系である。

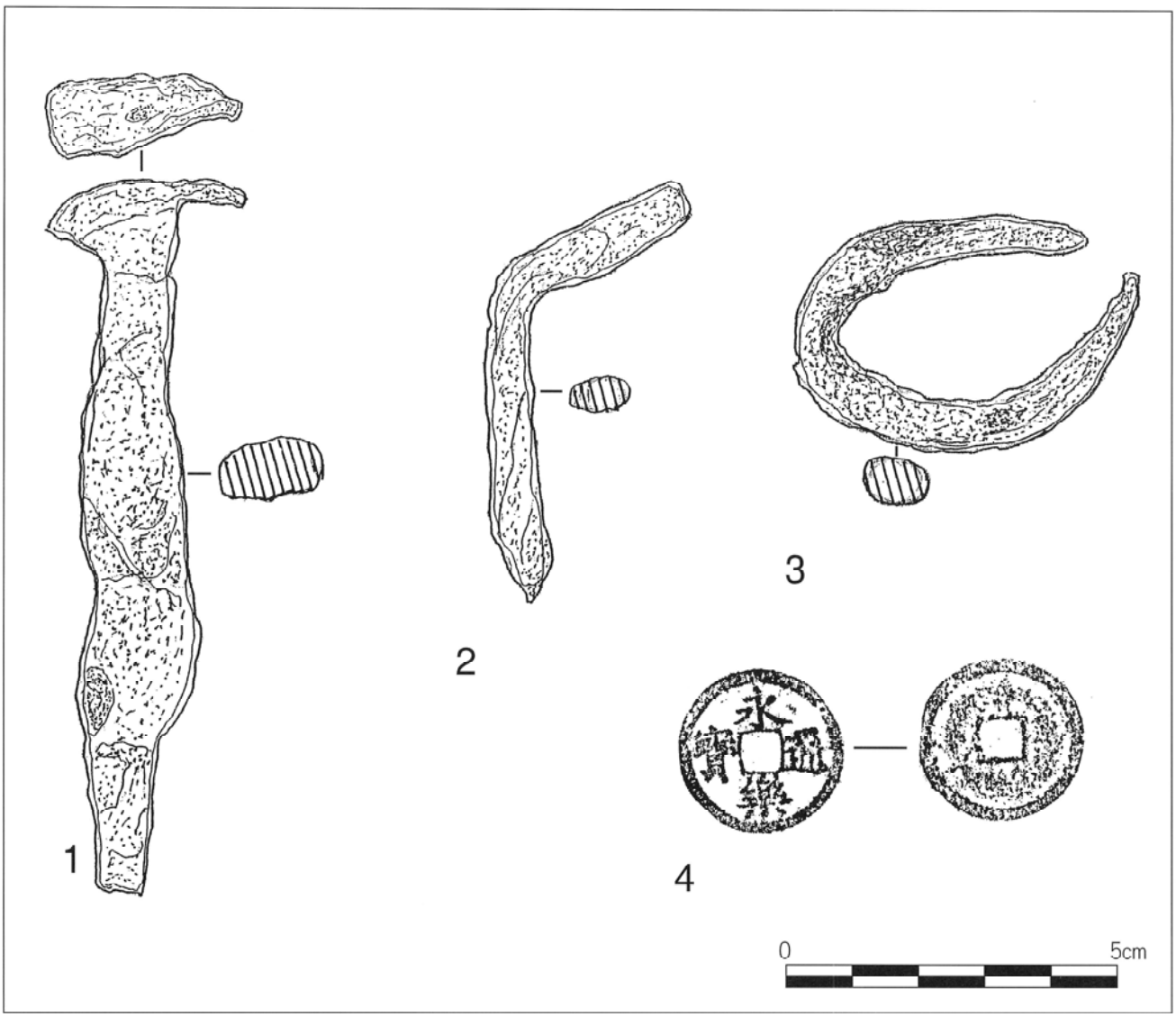
景徳鎮は中国南部の江西省東北部の景徳鎮市周辺の窯場で、16世紀から17世紀にかけて輸出用の磁器の生産が最盛期を迎え、日本にも大量にもたらされた。県内でも山形城や鶴岡城・米沢城より、これと同様の高台付小皿が出土している。また、都鳥の尾の部分と思われる赤絵磁器の小破片があるが、時期がやや降る京焼きかと思われる。

寺屋敷池状遺構周辺からは先年青磁や白磁片が発見されたが、このたび明末清初の輸入磁器などの出土が見られたことから、雅びの空間としての遺跡の性格を示すとともに、それにふさわしい遺物の発見があった。

また角釘と思われる鉄製品は銹化が著しいが（第19図）、この周辺の建物に付随するものであろう。「永楽通宝」も輸入銭であるが、この遺構が存在した時期のものである。なお寺屋敷上部の曲輪のトレンチより、瓦質土器片、磁器の小破片が発見されていることも付け加えておこう。



第18図　寺屋敷出土陶磁器片実測図



第19図　寺屋敷出土鉄釘実測図並びに銭貨拓影

第３章　D地区（裏山）の縄張図調査

本年度調査を行ったD地区は、左沢楯山城の北西に位置する通称「裏山」と呼ばれる一帯から弁財天にかけての範囲である。本調査委員会では、戦国末期の慶長５年（1600）出羽合戦のころまでに、最上氏勢力により急造・拡張された地区と想定している。しかし、古文書類や伝承及び城跡に由来する地名等がほとんど残っていないこと、更に、平坦地が畑や作業場に利用されていることから、後世に手が加えられている可能性が高いこと、以上の理由等により、いつごろ何の目的で造成され、どのように利用されていたかといったことは、ほとんど解明されていない。

本地区の縄張であるが、三角点のある曲輪Ⅰを拠点に３方向にのびる尾根筋に展開している。曲輪Ⅰは東西13m×南北10m程度のホームベース形をしており、主郭としては十分な広さとはいえない。せいぜい櫓を建てる程度であろう。南側に向かっては緩やかに傾斜しており、造成途中の感がある。

（A）の道を通り曲輪Ⅱに至り、これより先の曲輪は畑や道路として使用されているが、概ね当時の曲輪を利用しているものと考える。一段高い曲輪Ⅲから二手に分かれ、小さな曲輪が累々と続くが、その間に挟まれた谷部分は藪のため確認できていない。

北方向には、尾根筋道の２つのピークを経て曲輪Ⅳに至る。途中の東側斜面には曲輪群（B）が確認され、現状では東側からの唯一のルートである。曲輪Ⅳのさらに北には掘切と思われる地点（C）があり、ここを天神越の街道が通っていたと伝えられている。東側は道路の開削により破壊されているが、西側には３段の腰曲輪・帯曲輪が確認されている。さらに数段続いているが、笹の群生により調査が困難であり、かつ天神越の街道の見極めも必要なことから保留とした。一方、西側には２段の帯曲輪の下に曲輪Ⅴ・Ⅵが広がっており、南側斜面に対し巧みに段差を変え設けられた曲輪が、数十段にわたって配備されている。その先は作業場および国道となり当時の状況を留めないが、恐らくその麓の旧道付近まで続いていたと考えられる。なお、曲輪Ⅵの延長および北側斜面は未調査である。

D地区の性格としては、第１に調査が完了していないため全体が把握しきれていないが、特に南から西側に対する曲輪の配置が堅固なことから、左沢楯山城の西の押さえとして拡張整備されたと考えられよう。楯山城は北から東にかけては桧木沢、南側は最上川による断崖により天然の要害となっているが、比べて西側の防備が手薄であることは否めない。やはりそのため、伊達・上杉各氏との緊張が高まった戦国時代末期（天正12年～慶長５年頃）にかけて増築されたのであろう。曲輪の連続性や堅固な構造的特徴から、駐屯地やその場しのぎの一時的なというイメージではないが、曲輪Ⅰの南部分や曲輪ⅣおよびⅤ・Ⅵといった主要曲輪の整備状態が不十分なことから、造成途中である可能性が高いとも思われる。

第２に谷沢・六十里越街道に至る天神越の街道を押さえる機能も考えられる。その中心となるのは曲輪Ⅳおよびその周辺となろう。堀切（C）の北方、桧木沢付近には街道の一部が残っているので、今後の課題として全域の縄張図作成とともに街道の全容を押さえる必要がある。

第20図　裏山縄張図

第４章　成果と課題

第１節　調査の成果と課題

１．発掘調査の成果と課題

（１）成果の概要

今年度の調査は、左沢楯山城山頂部（八幡座）の北側３区と、八幡座南側の１段下の曲輪４区、さらにもう１段下の５区、それに寺屋敷の一部、寺屋敷より１段上の曲輪、計５箇所を発掘した。

八幡座の３区は、周辺部に柵列がめぐることが分かった。また尾根道の細い部分も発掘したが、柵列は部分的に確認できた。

４区については、四面廂（ひさし）がつき、間仕切りのある玄関もある建物一棟跡を確認。常駐も可能な施設と考えられる。「ゴホンマル」（御本丸）と呼ばれるにふさわしい遺構が確認されたと言えよう。ただ、冬は雪が深く、年間を通じた常駐はこの地域では考えられない。柵列は確認できなかった。

５区については、柱穴が出土、建物の規模を確認するには、立木の撤去が必要。水を貯めるために設置したと考えられる桶を置いた穴が７基出土。

寺屋敷については、池状遺構部分を拡大して発掘した。池状遺構の東縁より少し所に離れた柱穴が出土し、庵室的な建物を確認できた。また排水路の存在は予想できたが、最終的な流路の確認はできていない。出土遺物は、釘・古銭・陶器の破片などが出土している。

寺屋敷の上の曲輪については、トレンチ１本を入れ、柱穴が確認でき、柵列と建物があることが推定される。

（２）次年度以降の課題

第１に、寺屋敷における池状遺構を含む遺構全体を確認すること。苑池への入水路はどうなっていたか。第２に、寺屋敷の上の曲輪について、今年度試掘の成果をふまえて発掘し、遺構を確認すること。第３に、寺屋敷の下に築かれた広い曲輪の発掘調査をすること。第４に、蛇沢に落ち込む谷筋に築かれた曲輪群の性格を確認するために、試掘調査をすること。第５に、八幡平と呼ばれる曲輪の発掘調査をすること。第６に、居館跡を確定するための発掘調査をすること。これらのことが、次年度以降の課題として列記できよう。

２．縄張図調査の成果と課題

今年度はＤ地区、通称裏山といわれている地区の調査を行った。北側・東側・南側はほぼ終了したが、西側は藪が深く未調査の状況である。

これまでは裏山は慶長５年（1600）の出羽合戦に際して急ごしらえの山城ではないかと考えてきた。しかし、調査により、左沢楯山城山頂部（八幡座）周辺と同様、曲輪群の連続が見られ、急ごしらえというイメージは変更しなければならないようである。左沢楯山城の西側の防備及び天神越の道をおさえる重要な機能を有する曲輪群という位置付けがなされよう。慶長５年以前にすでに築造されていた可能

性が出てきた。その築造時期は、左沢大江氏の段階か、その後の最上氏直轄時代に入ってなのか、しかも天正12年（1584）以降のどの時期なのか、などを検討しなければなるまい。

今後の課題としては、西側の藪を伐採して調査を進め、裏山地区全体の縄張図を完成させることが急務である。そして、A・B・C・D地区全体の縄張図を完成させることである。

さらにB地区内の愛宕山がある周辺の位置づけも大切である。この地域には、城郭の造成された痕跡が見つかっていない。聖的空間として造成はせずに城郭の中に組み込んでいた可能性もある。今後の検討課題の一つである。

第2節　左沢楯山城保存整備

左沢楯山城の調査も、平成5年度（1993）の「左沢楯山城跡調査検討委員会」、ついで平成6年度から「左沢楯山城遺跡関連調査委員会」と改称して都合10年目になる。毎年『調査報告書』を提出しているのであるが、平成5年度の『調査報告書』の末尾には「最後に付け加えれば、この「調査委員会」は上記の活動をなし終えたならば、遺跡の保存整備と活用を考える「保存整備基本計画策定委員会」に発展的に解消することが望ましいと思われる。」と述べている。調査委員には当初から保存整備のことが念頭にあった、それだけ歴史的価値の高い遺跡であるという認識があったのである。そこで現時点において保存整備に向けて一提言をしておきたい。

まず大綱としては、第1に、大江氏・寒河江荘関連遺跡群として、西村山郡全体として保存の方向を考えていくべきであろう。その際には、広域合併問題も視野に入ってくるであろう。第2に、今後、町民など多くの方々の意見を聞きながら保存整備の策定方向を明確にしていく必要がある。フォーラム・シンポジウムの開催や既存の研究団体との協力などを念頭に入れておくべきであろう。

具体的には、①地域開発計画の中に取り込むこと。②厳密な調査・学問的裏付けが必要。測量図・縄張図・文献等の調査。住民の理解と納得を得て、町・県・国などの史跡指定も視野に入れる。③保存整備には、土地の買い上げが必要になってくるであろう。原型を大切にして、不必要なもの・施設を敷設しない。復元も慎重にすること、植生も配慮すべきであろう。④学校教育の地域教材や総合教材や総合学習に利用。生涯学習にも利用。研究にも活用。案内板・説明板の設置と出土遺物・遺構などの展示。などがあげられよう。

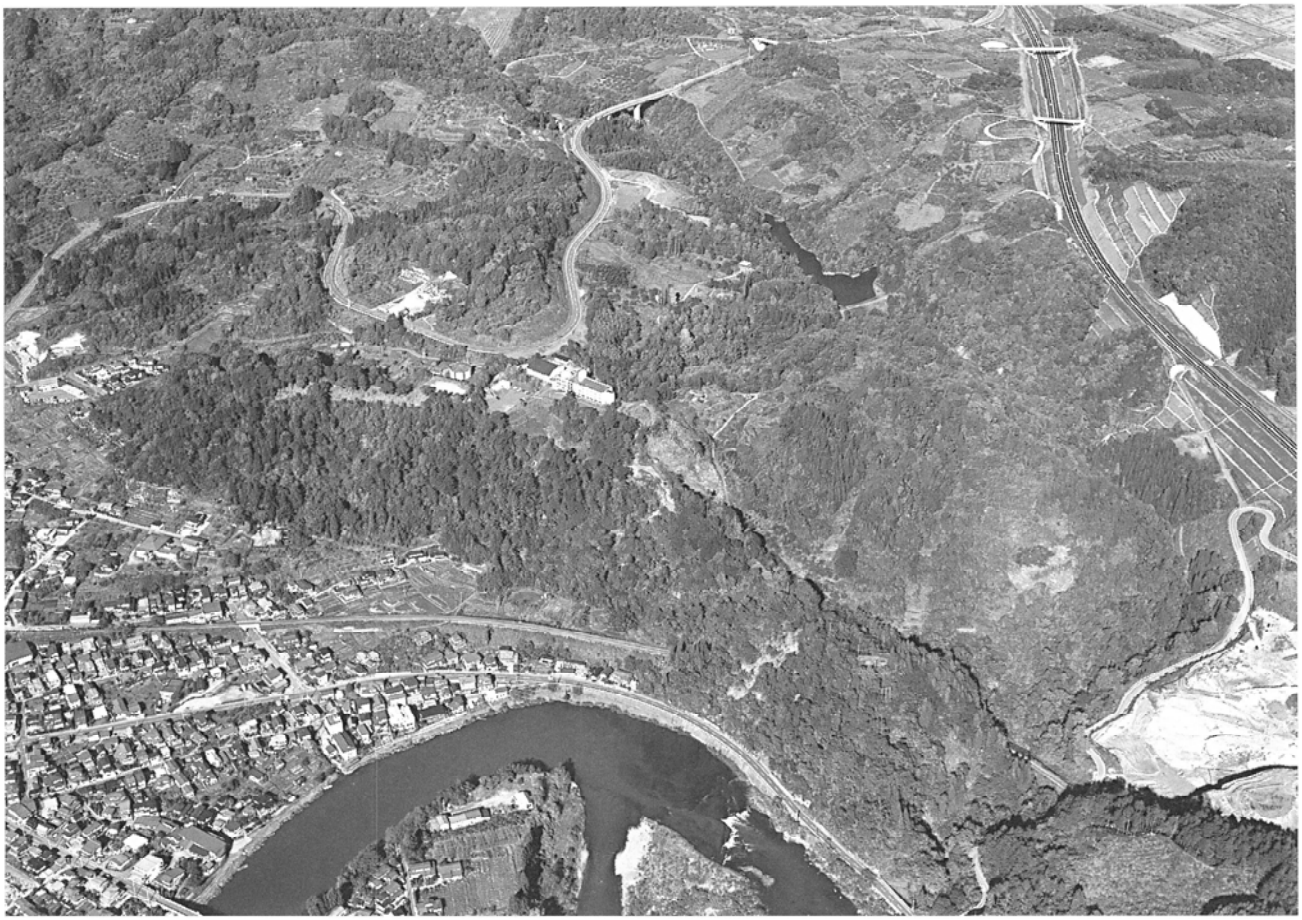


写真１　左沢楯山城遺跡全体

写真２　八幡座（４・５区）

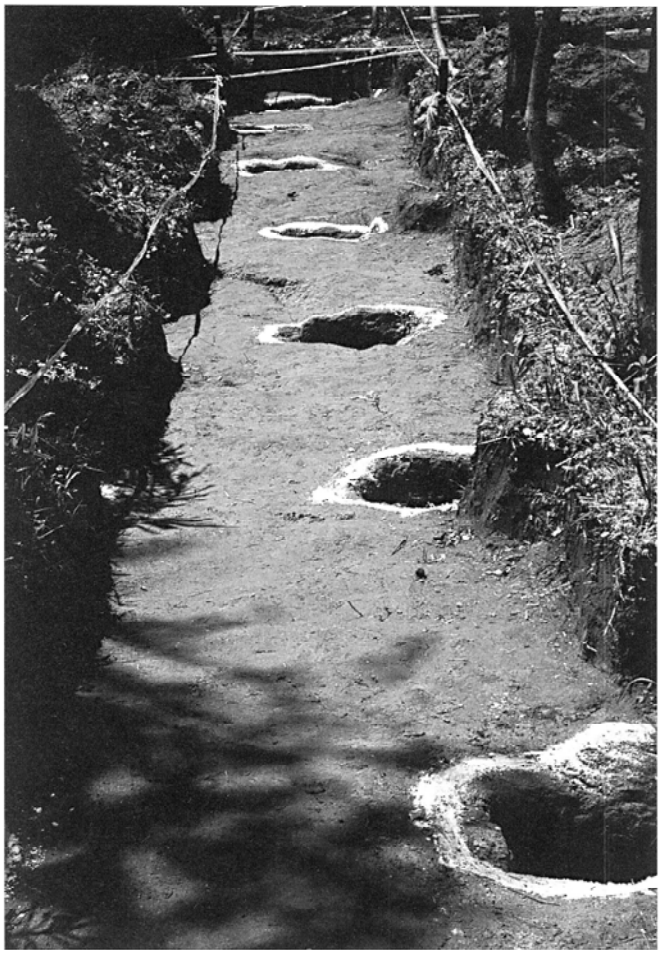


写真 3　八幡座 4 区柱列(東側)

写真 4　八幡座 4 区柱列(北側)

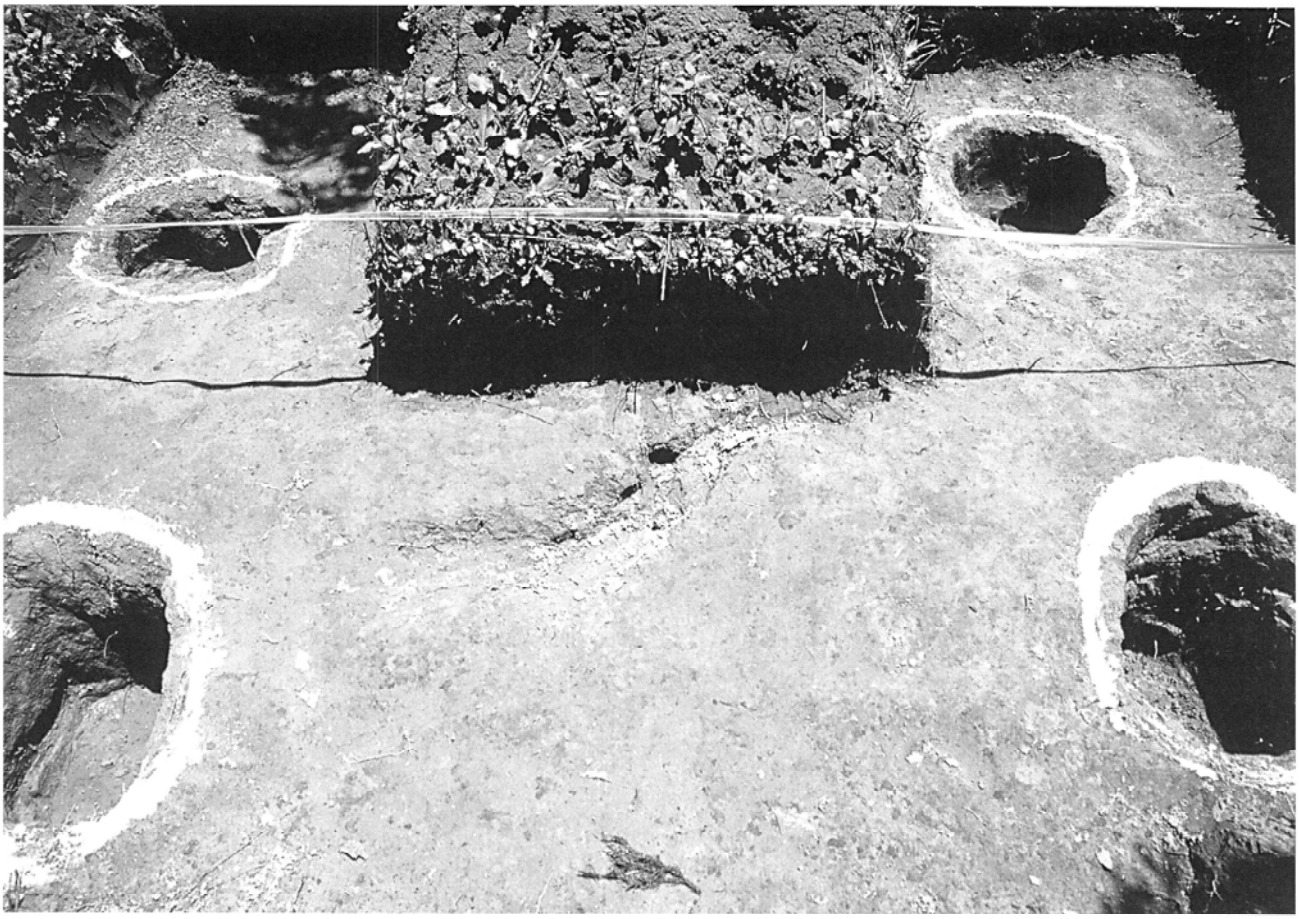


写真５　八幡座４区(廂部分)

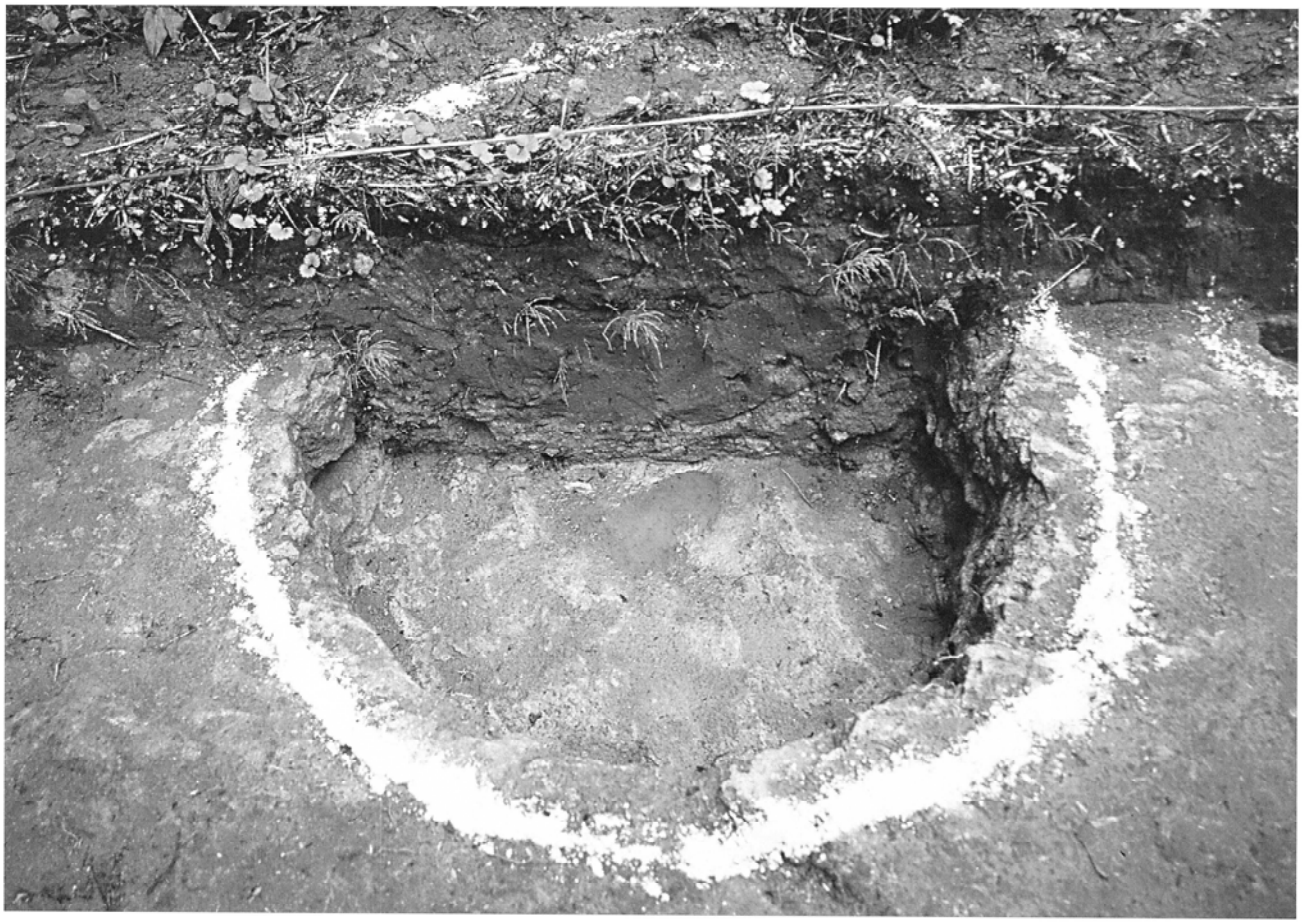


写真６　八幡座５区土坑(ＳＫ１)

写真７　八幡座５区土坑（ＳＫ２）

写真８　八幡座５区土坑（ＳＫ４）

写真９　八幡座５区土坑（ＳＫ６）

写真10　寺屋敷池状遺構（寺屋敷上部より撮影）

写真11　寺屋敷池状遺構

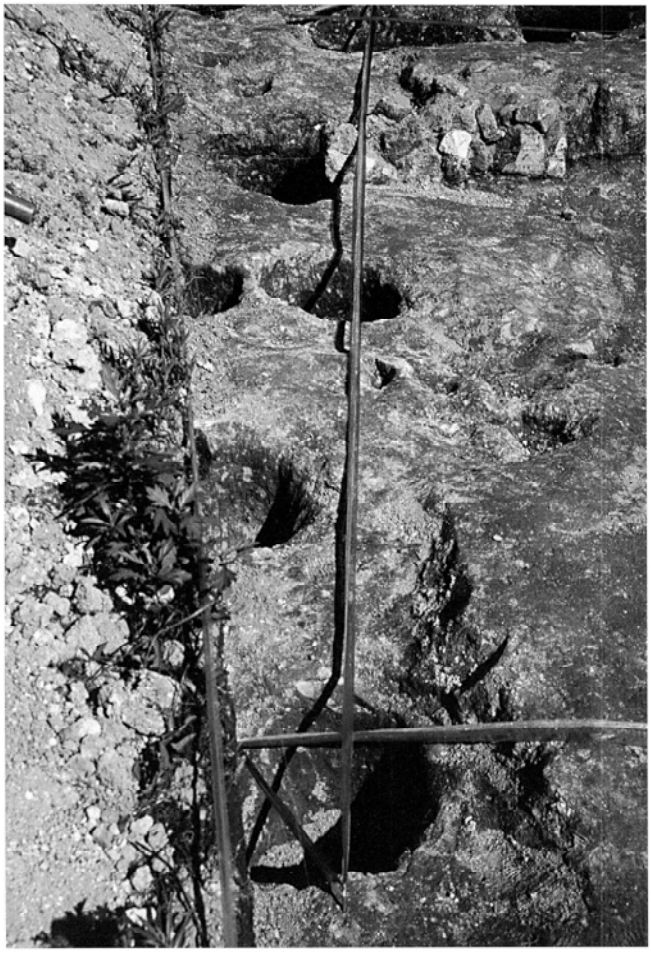


写真12　寺屋敷東側柱穴

写真13　寺屋敷トレンチ断面図

写真14　寺屋敷上部トレンチ

写真15　寺屋敷上部布堀跡①

写真16　寺屋敷上部布堀跡②

写真17　寺屋敷上部布堀跡③

写真18　寺屋敷上部布堀跡④

写真19　D地区（裏山）

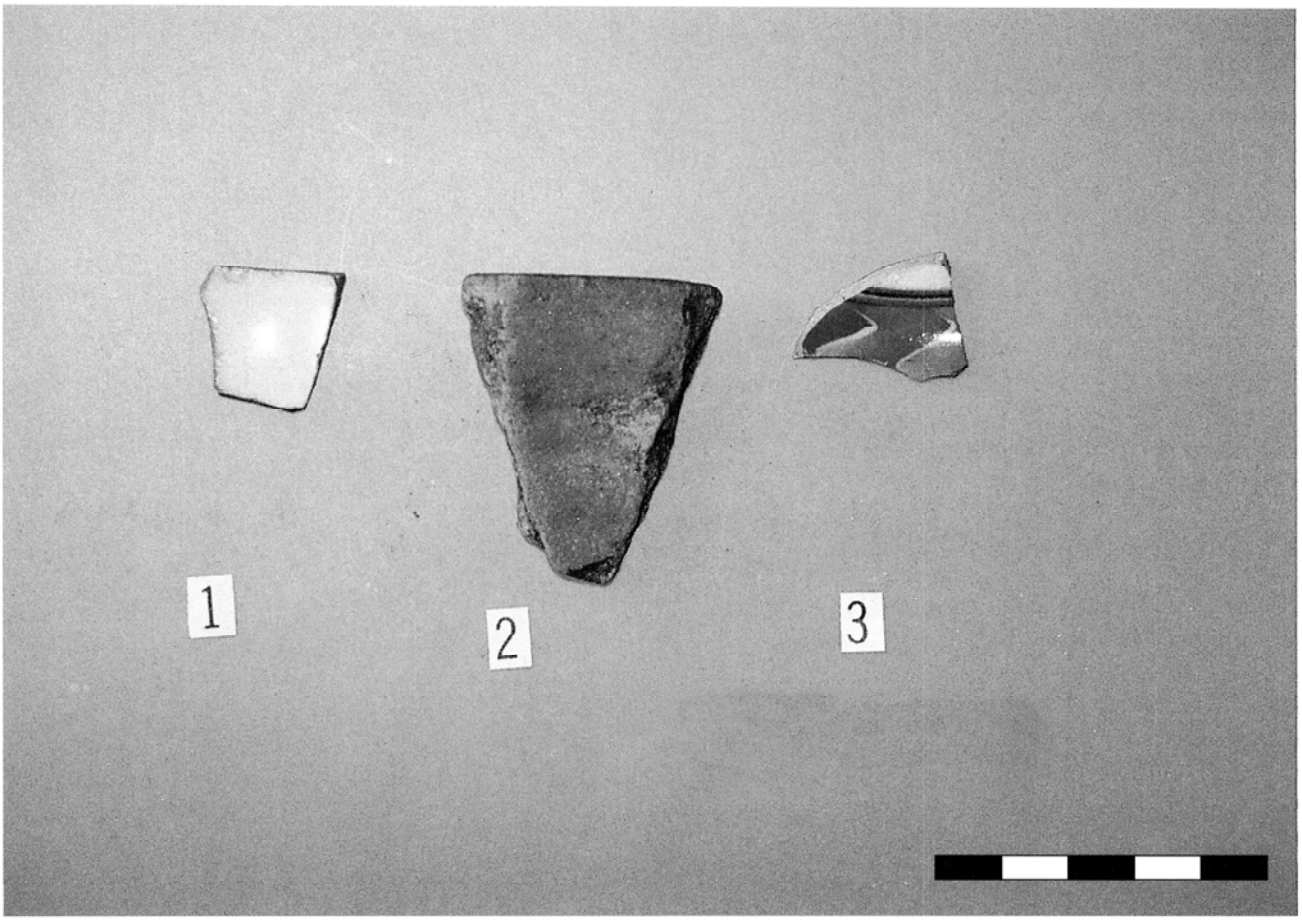


写真20　八幡座出土遺物

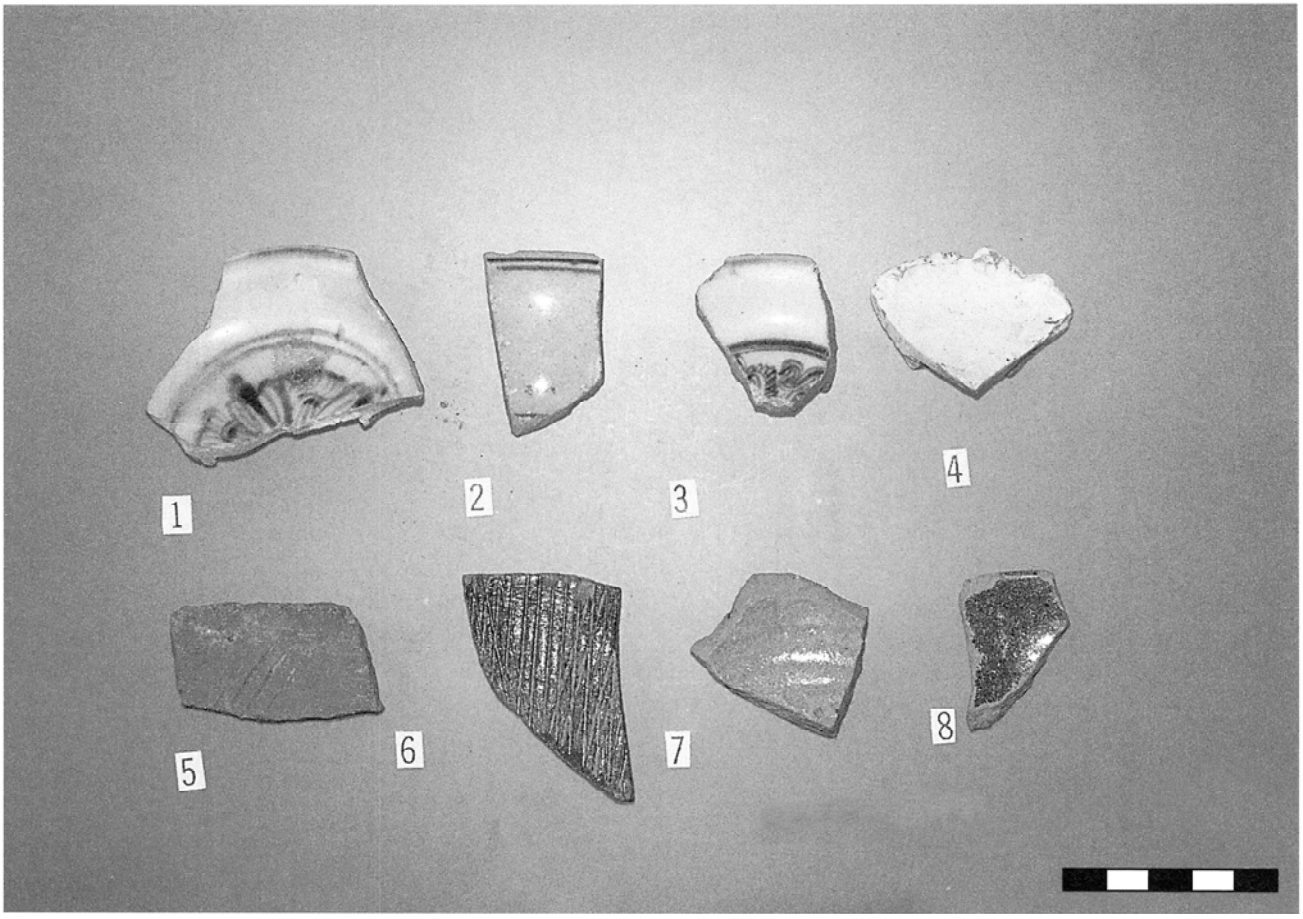


写真21　寺屋敷出土陶磁器①

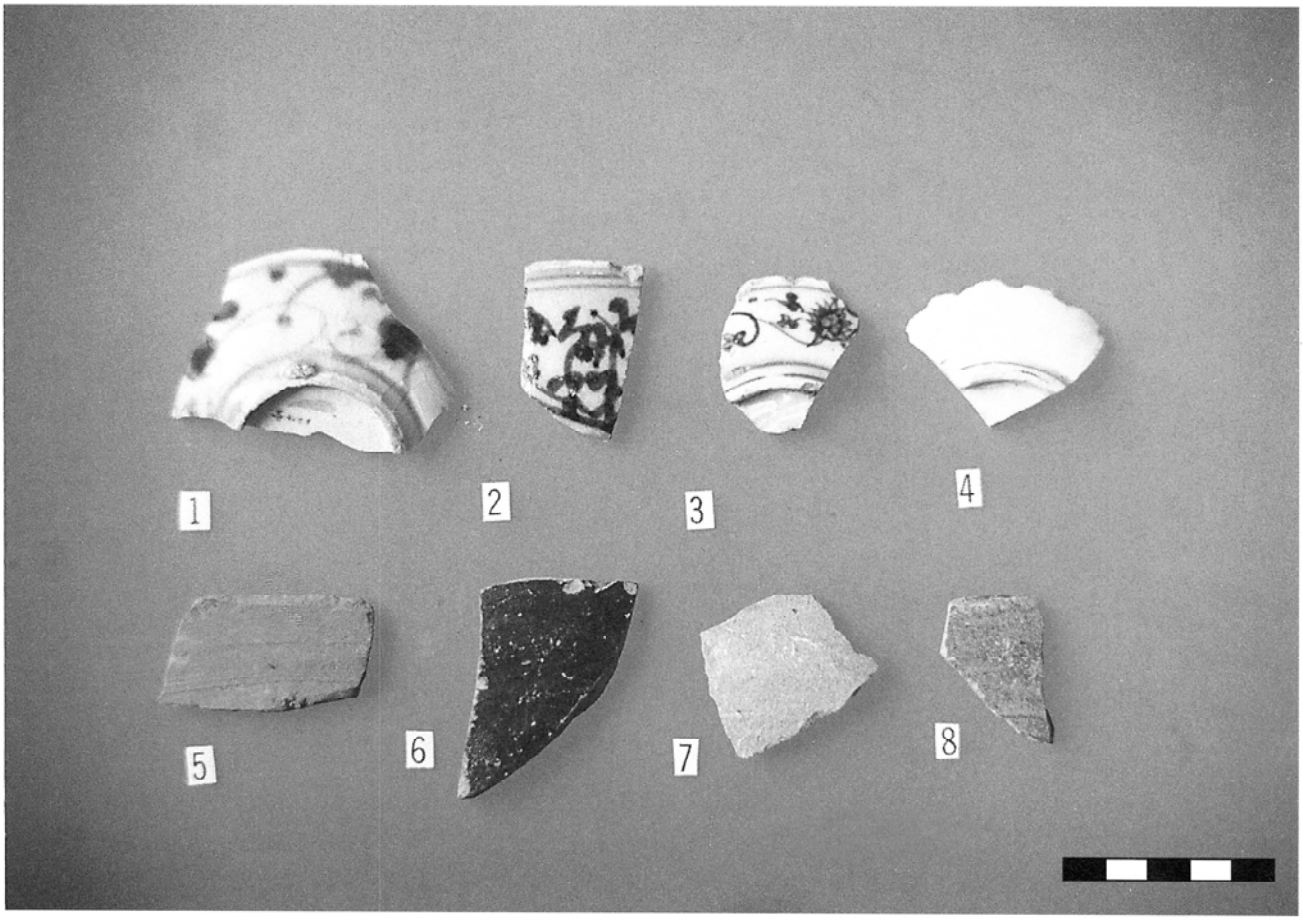


写真22　寺屋敷出土陶磁器②

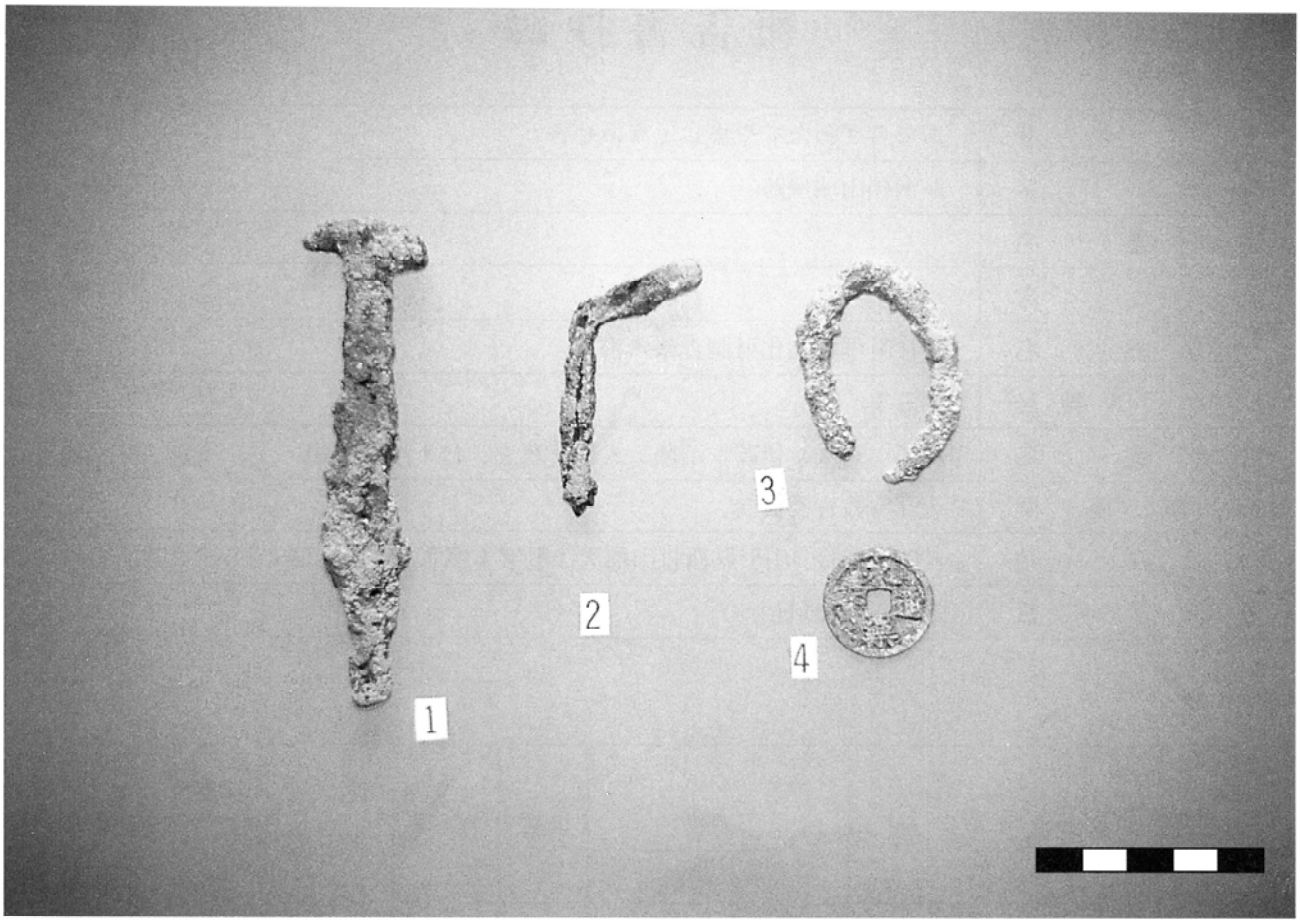


写真23　寺屋敷出土鉄釘

写真24　現地説明会風景

報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょういせき
書名	左沢楯山城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
著者名	川崎　利夫、伊藤　清郎、大場　雅之、日下部　美紀
編集機関	大江町教育委員会
所在地	〒990-1163　山形県西村山郡大江町字本郷丁373-1　℡0237-62-3666
発行年月日	2003年3月31日

所収遺跡名（しょしゅうしゅういせきめい）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
左沢楯山城（あてらざわたてやまじょう） 八幡座（はちまんざ）	山形県西村山郡（やまがたけんにしむらやまぐん）	324	324 — 001	38度 23分 10秒	140度 13分 10秒	2002.6.3 ～ 2002.7.12	450㎡	学術調査
寺屋敷（てらやしき）	大江町大字左沢楯山（おおえまちおおあざあてらざわたてやま）	324	324 — 001	38度 23分 05秒	140度 13分 00秒		300㎡	

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城館跡 寺院跡	16～17世紀	掘立柱建物跡 土坑（正円形）	染付磁器片 釘 古銭 池状遺構	八幡座4区曲輪より主殿らしい建物跡が検出された。5区より正円形土坑（7基）が検出されたが桶状のものを据え水などを貯留した可能性が高い。 寺屋敷より、池状遺構に付随する庵室的な建物跡が検出された。

大江町埋蔵文化財調査報告書　第６集

山形県西村山郡大江町
左沢楯山城遺跡調査報告書(5)

発行日　平成15年（2003年）３月

編　集　大江町教育委員会
発　行　山形県西村山郡大江町大字左沢882の1

印　刷　株式会社　若月印刷
山形県西村山郡大江町大字左沢105